

An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji*, 2

Yosuke KAWAKAMI

Department of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

だけである（怪↓咎、鑽在令郎肚裡↓鑽在令郎肚裏去）。ほぼ同文と言ってよい。

『笑府』第六四話（卷二・腐流部、一五丁表）

教法

主人咎師不善教。師曰。汝欲我與令郎俱死耶。主人不解。師曰。我教法已盡矣。只、除、非、要、我、鑽、在、令、郎、肚、裡。我、便、悶、殺。令、郎、便、脹、殺。

余説

例によって、無能な家庭教師を馬鹿にした話である。現在の日本人の感覚からすれば、先生の発した破れかぶれの捨てゼリフの言い回しが、少々面白いという程度にしか感じられないであろうが、この時代の中国では、文章を読み書きする力は、頭や心ではなく、お腹（肚）に宿ると考えられていたことを念頭に置いて読む必要がある。『訳解笑林広記』第一一話「無一物」、同第一三話「腹内全無」と合わせて味わうべき笑話であろう。

この話は、「もうわたしにはどうやっても教えられない、なんならわたしを丸ごと息子に食べさせてくれ」と言わんばかりの、単なるナンセンスギャグにも見えるが、実はそれだけではなく、学問はお腹に宿るといふ思想を踏まえている。「息子の文章力を高めるためには、もはやわたしを息子の『肚』に入れるしかない」と言っているのであり、さらには「でもそうしたら、わたしも息子も死ぬけどね」と主人に対する日頃の鬱憤を、この家庭教師はここぞとばかりにぶちまけようとしているのである。

（附記）

本稿は、平成二八年度科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号二四五二〇二四四）「東アジアの笑話と日本文学・日本語との関連に関する研究」による研究成果の一部である。

(すると、またある人は、こうツツコミを入れるであろう。)「ただ、横にくっついて口偏だけが、不服を申し立てるかもしれないがね。」

余説

最も基礎的なテキストである『大学』や『論語』の文章すら、正しく読むことができないという、例によって無能な家庭教師を馬鹿にした話。明清時代の中国では、小児科医や子ども相手の家庭教師は、しばしばこのように嘲笑された。

儒学の勉強は、まず四書五経の筆頭である『大学』から始まり、続いて『論語』『孟子』『中庸』の順に学習した。今で言うなら、小学校一年生あたりから『大学』を読み始め、一年次の年度末に『論語』郷党篇(第十篇)あたりにはさしかかった、という設定である。かなり具体的に、明清時代の知識人家庭における初等教育のさまが窺える。

㊸ 教法 (もう教える方法がない)

原文

教法

主人怪師^{ムム}不^レ善^カ教^ヲ。師曰^ク。汝^ニ欲^ス我^ト令^レ郎^ト俱^ニ死^ス。主人不^レ解^セ。師曰^ク。我^ガ教法^ハ已^ニ盡^ス矣[。]只^ダ除^ク非^要。我^レ在^リ令^レ郎^ノ肚^裏。去^ル。我^レ便^チ悶^シ。令^レ郎^ハ便^チ脹^殺。

書き下し文

教法

主人師の教に善からざるを怪む。師曰く。汝我令郎と俱に死せんことを欲するや。主人解せず。師曰く。我が教法已に尽たり。只だ除非我に令郎の肚裏に鑽在し去るを要するや。我は便ち悶殺し。令郎は便ち脹殺せん。

現代語訳

(家庭教師を雇っている家の) 主人が、先生の教え方は下手だと文句を言ったので、先生はこう言った。

「お前さまは、わたしに御息と一緒に死ねても言うのですか。」

主人には、先生が何を言っているのか分からなかった。そこで、先生は言った。

「わたしはね、もうすでに、あらゆる手を尽くして(あなたの息子さんに)教えてやっているのです。もうこれ以上は、わたしが御息さまのお腹のなかに入り込むより他に方法はありません。でもそうすれば、私は窒息して死んでしまうでしょうし、御息さまはお腹が破裂して死んでしまうことでしょう。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部(八丁裏〜九丁表)。『新鐫笑林広記』卷之二・腐流部(第一一話、一二丁表)。○怪師不^レ善^カ教^ヲ 先生の教え方が下手であると言って責め立てた。「怪[guai]」(責怪[reguai])は、とがめる、責め立てる意。現代中国語と同じ。左訓「シナンガヘタナリトグゼル」(指南が下手なりとぐぜる)。「ぐぜる」は、文句を言う意。「口舌(くぜち・くぜつ)」が動詞化し、さらに濁音化したものであろうが、「ぐぜる」の用例未見。○令郎 御息。左訓「オムスコ」(御息子)。○耶[ye] 疑問の助詞「〜か」。現代中国語(話しことば)の「嗎[ma]」に相当する文語表現。○除非 〳しない限りは」という意味の接続詞。現代中国語と同じ。ここでは「ただ〜する以外に方法はない」意。右傍訓「タ、(ただ)」。○鑽[zuan] (鑽で) 穴を空ける意。結果補語「在」と結びつき、「穴を空けて〜の中に入る」意となる。「我鑽在令郎肚裏去」は「私が御息の腹のなかに(穴を空けて)入っていく」意。左訓「ハイリコムヨリシカタガナイ」(入り込むより仕方がない)。○悶殺[mensha] 息が出来ず、窒息死する。和刻本『訳解笑林広記』は「悶[men]」を「悶[bi]」に誤刻している。今、原本『新鐫笑林広記』(乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊本、京都大学附属図書館蔵)により改めた。左訓「ムセヒシス」(噎び死す)。○脹殺[zhangshe] 腹がふくれて死んでしまう。左訓「ハリサケル」(張り裂ける)。

補注

この話は、『笑府』卷二(第六四話「教法」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』七三頁参照。なお、和刻本『笑府』三種などに類話はない。『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と異なるのは、二字

六〇三話「於戯」、『李卓吾先生批点四書笑』（国立公文書館蔵、写本）に類話がある。
 『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』六七〜六八頁、大木康『笑林・笑賛・笑府他（歴代笑話）』（中国古典小説選12、明治書院、二〇〇八年、二四八〜二四九頁）参照。なお、『笑府』所収話は、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（二七六八）京都刊、A本）に収録されている。

『笑府』、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（二七六八）京都刊、A本）、『絶櫻三笑』、『李卓吾先生批点四書笑』の原文は以下の通りである。『笑林広記』と『笑府』、『絶櫻三笑』と『李卓吾先生批点四書笑』は、それぞれほぼ同文である。『絶櫻三笑』と『李卓吾先生批点四書笑』には末尾に編者によるコメントが添えられている。笑話の内容は、四種すべて同じである。『絶櫻三笑』及び『李卓吾先生批点四書笑』に見える「編者のコメント」については、日本語訳（拙訳）を添える。

『笑府』第五七話（巻二・腐流部、一二丁裏）

讀別字「呉語謂之白字」

有訓蒙者。首教大學。至於戲前王不忘句。竟如字讀之。主人曰。誤矣。宜讀作嗚呼。師從之。至冬間讀論語註。雖雖古禮而近於戲。乃讀作嗚呼。主人曰。又誤矣。此乃於戲也。師大怒。訴其友曰。這東家甚難理會。只於戲二字。年頭直與我拗到年尾。

和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊、A本）第八話（巻上、三丁表）

有訓蒙者首教大學。至於戲前王不忘句。竟如字讀

之。主人曰。誤矣。宜讀作嗚呼。師從之。至冬間讀論

語註。雖雖古禮而近於戲。乃讀作嗚呼。主人曰。又

誤矣。此乃於戲也。師大怒。訴其友曰。這東家甚難

理會。只於戲二字。年頭直與我拗到年尾。

（ロ、ロエス、セリヨフ、タイシユ）

『絶櫻三笑』第六〇三話（巻四・儒笑九）

○於戯

蒙師教學。新赴館。先讀大學。至於戲前王不忘。竟如字讀。主人曰。誤矣。此宜讀作嗚呼。師從之。至冬間讀論語註。雖雖古禮而近於戲。乃讀作

嗚呼。主人曰。又誤矣。此於戲也。師大怒。訴其友

曰。此東家甚難理會。只於戲二字。年頭直與我

拘至年尾。

秀才不識字。只讀半邊。如此二字。只宜讀方

虛。萬無一失。曰。然則嗚呼二字。只消讀烏乎

矣。曰。便是旁邊的口不服耳。

『李卓吾先生批点四書笑』（国立公文書館、写本）

蒙師教學。新赴館。先讀大學。至於戲前王不忘。

竟如字讀。主人曰。此宜讀作嗚呼。師從之。至冬

間讀論語註。雖雖古禮。而近於戲。乃讀作嗚呼。

主人曰。此於戲也。師大怒而別。歸告其友曰。此

東家甚難理會。只於戲二字。年頭直拗至年尾。

畢竟不清。

秀才不識字。只讀半邊。如此二字。只宜讀方

虛。萬無一失。曰。然則嗚呼二字。只消讀烏乎

矣。曰。便是旁邊的口不服耳。

（編者のコメント）文字を知らない秀才は、半分だけ文字を読む。この二字（「於戯」）のような場合は（とりあえず文字の左半分だけを読んで）、「方虚 [fangxu]」と読んでおけば、万に一つも誤ることはないだろう（と、この秀才ならば考えるにちがいない）。

（ある人は、次のように言う。）「そうすれば、『嗚呼 [wuhu]』の二字は、（左半分を消し去って、『烏乎 [wuhu]』と読んでおけばよいですね。」

書き下し文

於戯左読

蒙訓者有り。首に大学を教ふ。於戯前王忘れずの句に至つ。竟に字の如く之を讀む。主曰く。誤れり。宜く嗚呼と作すべし。師之に従ふ。冬間に至て論語の註を讀む。儼は古礼と雖も而も戯に近し。乃ち讀て嗚呼と作す。主人曰く。又誤れり。此乃ち於戯なり。師大に怒り。其の友に訴て曰く。這の東家甚だ理會し難し。只だ於戯の両字。年頭より直に我と拗じて年尾に到る。

現代語訳

子ども向けの家庭教師、まず最初に（四書五経の最も基礎的なテキストである）『大学』を教えた。（このテキストの第三章に出てくる文章）「於戯前王忘れず」のくだりまできたとき、この先生は「於戯」[yuxi]という二字を、正しく「於戯」[wudu]とは読まず（なんと文字通りに「於戯」[yuxi]と）読んでしまった。（それを聞いて）主人が、

「間違っていますぞ。ここは『於戯』[wudu]と読まなければなりません。」と言ったので、先生はその言葉に従った。

（それから一年が過ぎて）冬になり、『論語』（郷党篇）の注「儼雖古礼而近於戯」（儼は古礼と雖も而も戯に近し）（朱子『四書集注』に見える）というくだりを読んでいるとき、（かつて主人が言った通りに「於戯」[yuxi]の二字を）「於戯」[wudu]と読んだ。（すると、それを聞いて）主人は言った。

「また間違っていますぞ。ここは『於戯』[yuxi]と読まなければなりません。（今度ばかりは）先生もカンカンに腹を立て、怒りを友だちにぶちまけた。「この主人は、どうも訳の分からん奴だぜ。『於戯』というたつた二文字のことぐらいで、年の初めから年の終わりまで、ずっとケチをつけ通していやがる。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・腐流部（八丁裏）。『新鐫笑林広記』巻之二・腐流部（第一〇九話、一二丁裏）。○左讀＝本来右から左へ読むべき文章を、左から右へ読むこと。つまり「間違った読み方をする」意。左訓「ヨミチカイ」（読み違い）。○蒙訓＝訓

蒙、児童を教え導くこと。「蒙」は「蒙」の異体字。「蒙」は知識のない子ども、「訓」は教えさすとす意。文法的には「訓蒙（動詞＋目的語）」とあるべきところ。『笑府』第六四話「教法」、『訳解笑林広記』第二九話「改対」は、「訓蒙」に作る。左訓「コドモジシャウ」（子供師匠）。○首々教大學＝最初に（四書五経の筆頭である）『大学』を教える。「教」とあるのは、原文のママ。書き下し文は、規範的な歴史的仮名遣い「教ふ」に改めた。○於戯前王不忘れ句＝「大学章句」伝第三章に「詩三云」として引かれる「詩経」周頌・烈文篇の一節。「於戯」の二字は、文字通りに発音すれば「於戯」[yuxi]となるが、『詩経』のこの一節は、例外的に「於戯」[wudu]（感嘆詞「ああ」）と発音しなければならない。『四書集注』（元禄五年（一六九二）和刻、卷一・五丁表、

早稲田大学図書館蔵）に「於戯。音嗚呼。」（「於戯」の発音は「嗚呼」[wudu]である）「於戯。歎辭。（「於戯」は感嘆詞である）」とある。『經典余師（四書）』卷一（七丁裏）は「詩ニ云、於戯前王不忘れ」（詩に云く於戯前王忘れず）と訓読し、「於戯とはかんしんの詞也」と解説する。『訳解笑林広記』は「於戯」の二字にそれぞれ平声の声点符号（文字の左下にある小さな○印）を附し、さらに文字の右傍に圈点を附す。○儼雖古禮而近於戯。＝朱子による『論語』の注釈書『四書集注』に見える。和刻本『四書集注』（元禄五年（一六九二）刊、卷二・一四丁裏）に、「儼雖古禮而近於戯」とある。「儼」というのは、（理想的な時代である）古代から伝わる儀式ではあるが、（今では一見）子どもの遊びのように見える。」という意味。この場合の「近」於戯（戯に近し）は、文字通り「yuxi」と読まなければならない。「儼」は、『四書集注』に「儼乃多反」（「儼」は、「乃」多の反切（前者の子音と後者の母音を組み合わせた発音）である、つまり「儼」の漢字音は「ダ」とあるのに従い、「ダ」と読む。○東家＝主人、亭主。左訓「テイシユ」（亭主）。○難理會＝理解しがたい。左訓「ムツカシイ」。○従り年頭一直與我拗到年尾。＝年の初めから、年の終わりまで、ずっと自分にケチをつけ通しである。「直」＝「一直」[yuzhi]（「まで」）と、絶え間なく。「拗」[niu]は、反対方向にねじ曲げる、刃向かう意の動詞。左訓「トシハシメヨリトシズヘマデモカフテラル」（年始めより、年末まで、向かふてをる）。

補注

この話は、『笑府』巻二（第五七話「読別字」）、『絶纓三笑』巻四・儒笑九（第

潛ミ伺フ師大音ニテ這前面赤壁ノ賊ハト謂ケル
 二賊大ニ驚キ思ヒケルハ前面ニ潛ミシヲ已ニ覺ラレタレ
 ハ房後ヨリ穿チ入ント夜已ニ深テ師講完テ後房
 ニ往寝ントテ既ニ床ニ上リ復弟子ト論シテ後赤
 壁ノ賊ニ及ヒ後赤壁ノ賊ト讀ケレハ偷見外ニ有
 テ嘆息シ我前後ノ行藏悉ク此先生ニ識破セラ
 ル這樣ノ先生ヲ招家ハ狗ヲ養ニ及スト感ジテ去

『訳準笑話』第一二九話(二四丁裏)

村學究寄「鬪ス人家」夜為子弟誦レ文ヲ讀賦ノ字ヲ為賊ト適有
 偷兒。潛造窓前。聞其呼前赤壁賊。悄然斂跡。邊抵後
 庭。亦呼後赤壁賊。偷兒膽潰。曰。我之所至。彼輒識破。
 留養如是。先生。不復須畜レ狗ヲ矣

ほんくらの田舎儒者(「村学究」の左訓「ザイゴガクシヤ」は「在郷(田舎)の学者」の意)、雇われ教師として、何とか糊口をしのいでいた。

ある夜、教える子のために(教科書の)文を読み上げていたところ、(文体名の)「賦」という文字を(「こそ泥」という意味の)「賊」と読んでしまった。折しも、泥棒がこっそり窓の外に身を潜めている最中だったので、泥棒は「(家の)前(にいる)赤壁の泥棒(「前赤壁賊」と呼ばれる声を耳にして、抜き足忍び足でその場を離れ、ぐるっと回って、裏庭の方へやってきた。するとまたしても、「(家の)後ろにいる赤壁の泥棒(「後赤壁賊」と呼ばれる声)だったので、泥棒は肝を潰して、こう言った。

「私が行くところ行くところ、すべてこの人に見破られている。このような先生を抱え込んでゐるならば、もはや狗を飼う必要などないであろう。」

『訳準笑話』の本文は、内容は『笑林広記』とほぼ同じだが、文体は古典的な漢文に書き換えられている。たとえば、『笑林広記』に用いられていた会話文中の語気助詞「呀」「了」や口語的な白話語彙「這樣(このような)」「都(みな)」などは削除され、

文言語彙である「寄鬪」「斂跡」「如是」などが書き加えられているのである。「訳準」、つまり「日本人が正しい漢文で文章を作成するときの模範例文(漢訳にあたっての基準)」を示すという本書の表向きの出版意図を反映したものと考えてよいであろう。『訳準笑話』の文章は、このように概ね極めて古典的な文言で綴られている。言い替えれば、古代中国語の語法に従った難解な文章であり、一般的な中国人にとっては読みにくい(高級な)文章になっている、ということである。

余説

ほんくら教師の読み違いが、今度は泥棒を追い払ったという笑い話。

これまでの話は、読み違いによる失敗譚ばかりであったが、今回は、「読み違いによる儲け話」という趣向であろう。ただし、あくまでも「ほんくら教師」を馬鹿にするのがこの話の狙いであり、「へっほこ儒者の読み違いで泥棒が退散したなどという、そんな馬鹿げたことが実際にあつてたまるものか」という痛烈な皮肉を、ここにも敏感に嗅ぎ取るべきであろう。

なお、「このような先生を雇っているならば、番犬を飼う必要などありはすまい」という最後の一句を、『訳解笑林広記』第一七話「狗頭師(戌年生まれのパカ教師)」の場合と同じように、このほんくら教師を人間以下の獣である「狗」並に取り扱おうとしている、と解釈すれば、さらに一層シニカルである。

②⑤ 於戲左読(「於戲」の二文字を読み間違える)

原文

於戲左讀

有「蒙訓者」首メ教大學。至於戲。前王不忘れ句。竟如クケ字ノ讀ム之。主曰ク。誤リ矣。宜ク讀作「ス嗚呼」。師從之。至冬間。讀論語。註。儼雖トモ古禮ト而近於戲。乃讀作「ス嗚呼」。主人曰ク。誤リ矣。此乃於戲也。師大怒。訴其友曰ク。這「東家甚難理會」。只於戲ノ兩字。從「年頭」直ニ與。我拗シテ到「年尾」。

違へり」という訳注が附されている。○赤「作_ス折_レ字_ト」（割注）＝「赤〔ch〕」という文字を「折〔ch〕」という語の意味で理解する（原注）。明清時代の呉方言では「赤」と「折」は同じ発音であった（『笑府』巻十・形体部、第四四話「赤鼻」の原注に「呉語赤折同音」（五丁裏）とある）。三国時代の古戦場であり、明代白話小説『三国演義』の名場面として有名な「赤壁」の二字を、同音の別字「折壁」と解釈した場合には、「壁をこわす」という意味になる。ただし、和刻本『訳解笑林広記』のテキストは「折〔ch〕」を「折〔zh〕」に誤刻している。今、原本（京都大学附属図書館蔵『新鐫笑林広記』乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊本）により改めた。○前_レ面_ハ既_ニ覺_フ（おぼふ）、原文のママ。書き下し文においては、規範的な歴史的仮名遣い「覚ゆ」（改めた。○穿_レ穿_レ〔chuan yu〕＝穿_レ穿_レ、壁に穴を開けて（穿）、塀を乗り越える（穿）こと。古代中国においてはもとより、明清時代に至るまで、泥棒は実際に壁に穴を開けて家の中に忍び込み、物品財宝を盗み取った。『論語』陽貨篇一二に、「子_ノ曰。色厲_ノ而内荏_ル。譬_ニ諸_ノ小人_ニ。其_レ猶_ニ穿_レ穿_レ穿_レ穿_レ之_ノ盜_ノ也_カ與_{（色厲しく内荏なる諸を小人に譬、其穿穿穿穿の猶き與）}」（訓点および書き下し文は『経典余師（四書之部）』卷四（二五丁裏）による）とある。○後_房＝母屋の裏側に建てられた家屋のこと。母屋を「正房」「前房」というのに対して、裏側の家屋を「後房」という。多くは妾の住む建物として利用されたが、『笑林広記』の用例により、お抱えの家庭教師の寢所としても利用されていたことが分かる。本話では、さらに家庭教師が教え子（家の主人の息子）と寢所でベッドに横になりながら、この日の講義内容（赤壁の賦）について話し続けている設定になっている。『笑林広記』の記述から、明清時代の知識人家庭における日常生活が垣間見られることは、この笑話集が一級の風俗資料としての価値を有することを示している。○後面_ノ赤_壁賦_ニ蘇_軾賦_ニ後_赤壁_ノ賦_ニ（赤壁の賦の後半部分）のこと。「後」、左訓「アトノ」（後の）。○亦_ヲ如_レ前_ノ讀_ム。＝またしてもさきほどと同じように読んだ。「亦」を「なを」と読むのは珍しいが、この文章の語勢としては適切である。「またしても、さつきと同じように（間違つて文字を）読んだ」の意。○我_レ前後_ノ行_レ藏_{。悉_ク被_レ此_ノ人_ニ識_レ破_{。私_ノの行動は、始めから終わりまで、すべてこの人に見透かされている。「我」、原文「我」。今、意によって改めた。「前後」、さつきのことと、その後でした、今のこと。左訓「アトサキノ」。「行藏〔xingcang〕}}

は、動静、秘密、内幕の意。左訓「シハサ」。「識破」は、見破る、見透かすこと。左訓「シリヌカレタ」〔知り抜かれた〕。○人家_ニ話_シことばでは、「他人様」〔ひと（他人）の意で使用するのが普通だが、こゝは文字通り「人の家」「家庭」の意。そのような「家」では、番犬を飼う必要がない、という次の一文にもかかっている。左訓「ヒト〜」（人々）。○看_レ家_ノ狗_{〔kanjagou〕}＝家を見守る犬、つまり番犬のこと。「看」は、「見る」意のときは「kan」と発音されるが、「家を見守る」意の場合は「kan」と声調が変わる。左訓「カヒイヌ」（飼ひ犬）。○不_レ消_ニ養_レ得_レ了_ニ飼_ウ必要_ナい。左訓「カウニモヲヨバナ」（飼うにも及ばぬ）。○呀_ハ助_レ詞_也（割注）＝「呀」は、助詞であるという意味。「呀〔ya〕」という語は、文の中間または文末に用いられる語気助詞。日本語の「〜なあ」「〜よ」に当たる。この割注は、遠山荷塘による訳注であり、原本にはない。

補注

この話は、原本『笑府』、和刻本『笑府』三種、また『笑顔はじめ』『解顔新話』『即当笑合』に類話はない。『笑林広記』所収話の翻訳が、東洋文庫24『中国笑話選』江戸小咄との交わり（松枝茂夫・武藤禎夫 編訳、平凡社、一九六四年、二六四頁）、中国古典文学大系59『歴代笑話集』（松枝茂夫訳、平凡社、一九七〇年、三五八頁）に備わる。

なお、伊丹椿園による『笑林広記鈔』（安永七年（一七七八）刊、第一話「赤壁賦」、四ノ五丁裏〜六丁表）に、漢字カタカナ交じり文による和文訳が備わり、津阪東陽による『訳準笑話』（文政七年（一八二四）刊、第一二九話、二四丁裏）には、『笑林広記』所収話を古典漢文の文体（文言）に書き直した漢文笑話（内容は同じ）が収まる。『笑林広記鈔』および『訳準笑話』の原文は、それぞれ以下の通り。『訳準笑話』については、拙訳を添えておく。

『笑林広記鈔』第一一話（四ノ五丁裏〜六丁表）

赤壁賦

庸_師一夜_{弟_子ト}前後_{赤_壁ノ}両_賦ヲ_{講_論ス}賦

ノ字ヲ_{賊_ノ字_ト思_ヒイタリケルニ}適_{儉_尼アツテ}意外_ニ

先生「看家狗都不消養一ルヲ了」[呀、助詞也]

書き下し文

赤壁の賦

庸師別字を慣読す。一夜徒と前後赤壁の両賦を講論す。竟に賦字を念じて賊字と為す。適たま儉兒有て潜在窓外に伺ふ。師乃ち朗誦大言して曰く。この前面の赤「拆の字と作す」壁賊呀。賊大に驚き。因て思ふ前面は既に覚ゆ。若かず後房に往て穿窬して入んには。時已に夜深く。師講し完り後房に往て寢に就く。既に床上に上る。復た徒と後面の赤壁賦に論及す。亦を前の如く読む。儉兒外に在り嘆息して曰く。我前後の行蔵。悉く此の人に識破せらる。人家この様な先生を請了せば。看家狗も都養ひ得るを消ひず。「呀は助詞也」

現代語訳

ほんくら教師、しょっちゅう文字を読み間違える。ある夜、弟子といっしょに「前赤壁の賦」「後赤壁の賦」を講読していると、こともあろうに「賦」を「賊」と読み間違えた。

ちょうどそのとき、泥棒がこっそり窓の外から中をうかがっていた。先生は、大きな声を張り上げて、次のように朗々と（蘇軾の有名な「賦」のタイトルを）読みあげた。

「この、前の赤壁の賦についてだが……（訳者注：ほんくら教師は「この、『赤壁の賦』の前半部分についてだが……（『這前面赤壁賦呀』と言ったつもりなのだが、『赤[chi]』と「拆[chai]」の発音が呉方言では同じである上に、「賦[fi]」を「賊[zei]」と読み間違えてしまったため、壁をこわして家宅侵入をたくらんでいた泥棒の耳には、「壁をこわそう」としている、こちら側の泥棒よ（『這前面拆壁賊呀』）という意味に聞こえたのである。ちなみに、蘇軾の「赤壁の賦」は、前半部分の「前赤壁の賦」と後半部分の「後赤壁の賦」の二部に分かれている。）」

泥棒は、（これを聞いて）びっくり仰天。「もうこちら側の壁（に泥棒が潜んでいること）はバレている、母屋の向こう側へ行って、壁に穴を開けて侵入した方がよい。」と考えた。

夜も更けてくると、先生は講読を終え、（母屋の裏側にある）奥の建物（寢所）に下がっ

て寝ることにした。ベッドに入り、弟子とふたたび「後赤壁の賦」について語り始めたところ、今度もまたさつきと同じように、「後赤壁の賦」を「この後ろ側の壁をこわそう」としている泥棒よ（『這後面拆壁賊呀』）と聞こえるような発音で）読みあげた。泥棒は、外で溜息を吐きながら、こう言った。

「やれやれ、俺の行動は始めから終わりまで、すべてこの人に見透かされている。このような先生を家庭教師に雇っている家では、番犬を飼う必要などありはすまい。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部（八丁表裏）。『新鐫笑林広記』卷之二・腐流部（第一〇八話、一一丁表裏）。○赤壁賦＝宋代の文人、蘇軾（字は東坡）が作った「賦」。一賦とは、韻文と散文を組み合わせた文体のこと。多く歴史的な事件や風物が描かれる。江戸時代の文人たちの基礎的漢文読本であった『古文真宝（後集）』（中国宋代に編集された注釈付きの詩文集、江戸時代の日本では、和刻本として、元文五年（一七四〇）刊、宝暦十二年（一七六二）重刻、文化十五年（一八一八）補刻など、数多く出版された）には、「賦」のすぐれた作品例として、蘇軾「前赤壁賦」「後赤壁賦」のほか、賈誼「弔屈原賦」、杜牧「阿房宮賦」、歐陽脩「秋声賦」などが収録されている。○庸師＝平凡な先生。伊丹椿園訳『笑林広記鈔』（安永七年（一七七八）刊、六丁表）には「庸師」と訳されている。○儉兒「[chi]」＝「小儉」、泥棒、こそ泥のこと。左訓「ヌスヒト」（盗人）。○這前面赤壁賊呀＝発話者（ほんくら教師）としては、「この、『赤壁の賦』の前半部分についてはなあ」というつもりで言っているであろうが、「賦」を「賊」と読み間違えてしまったため、外から中を窺っている泥棒の耳には、「この、前の方の壁をこわそう」としている泥棒めが！と聞こえたのである。「呀[ya]」は、語勢を整えるための語氣助詞。文の中間に用いられた場合は、「よ」についてはなあ「の」「なあ」に相当する語氣を添える。ただし、「こっちへ来いよ（你来呀！）」の「よ」のように、文末に用いられれば、呼びかけるような語氣が加わる。ほんくら教師の意識では「『前赤壁の賦』についてだがなあ」と話してただけであるが、それが泥棒の耳には、「このこちら側の壁をこわそうとする泥棒め、おい！」という意味に聞こえたのである。「前」、左訓「マヘノ」（前の）。なお、和刻本『訳解笑林広記』には、この箇所の上段欄外に「カベヲホジルヌスヒトトヨミタカヘリ（壁を穿る盗人と読み

二升」であるが、『笑林広記』においては「銀三分」となっている点、また『笑林広記』では、『孝経』「是何言興。是何言興。」に加えて、『論語』先進篇一四「夫人不言。言必有中」の読み間違いも追加している点が異なっている。

『絶纓三笑』第五九五話「大学序」の原文と拙訳は『訳解笑林広記』第二三話「退東修」の補注に掲載しておいたが(六一―六〇頁)、『李卓吾先生批点四書笑』所収の原文と併せて、該当箇所原文と拙訳をここに再録しておく。『四書笑』および『絶纓三笑』掲載話は、「下士」のコメントが加えられている以外は、『笑府』所収話とほぼ同文である。

『李卓吾先生批点四書笑』(国立公文書館蔵、写本)
有主人以米數石延蒙師。与之約。讀一別字。

罰米一升。至散館。計一年所讀退却。止存米二升耳。師大失望。歎曰。是何言興。是何言興。蓋誤與為興也。主人曰。連二升一直。無有了。下士曰。生前。既已。退訖。死後或無果報。○

又曰親當作新 身當作心 有果報 無果報

『絶纓三笑』第五九五話「大学序(一説の二)」(巻四、儒笑一)

○有主人以米數石延蒙師。與之約。讀

一別字。罰米一升。至散館。計一年所讀退却。止存米二升耳。主人取置案上。師大失望。歎曰。是何言興。是何言興。蓋誤與為興也。主人願童子曰。連二升一併拿進。下士曰。生前。既已退却。死後或無果報。

○ある主人、米數石でほんくら教師を招き入れ、文字を一つ読み間違えたら、罰として米一升を減額すると約束させた。家庭教師の任が明けたとき、一年間で読み間違えた分を精算し、給料から差し引くと、米二升しか残らなかった。主人は

(その二升の米を)机の上にドンと置いた。ほんくら教師はがっかりして、言った。「『孝経』の文句を引きながら)『是何言興。是何言興。』(これは何たることか。これは何たることか。)(正しくは、『は何言興。は何言興。』(これは何たることか。これは何たることか。))という意味なのに、またしても文字を読み間違えたのである。)

「與[ru]」を「興[xing]」と間違えたのである。主人は、下僕の少年に言いつけた。

「残りの二升も、ごっそり片づけてしまいなさい。」

問道下士(『絶纓三笑』の評者)曰く、(この先生のように)この世ですでに罰金を支払っている場合、あの世に行つてから因果の報いを受けずに済むのだろうか。

余説

文字の読み違いが多すぎる家庭教師、ついに罰金制度が導入され、給料はゼロになつたという笑い話。

話しことばの中国語を自由に話せる中国人であっても、『論語』や『孝経』といった古代中国語で書かれた古典漢文は、しっかりとした教育を受けなければ、(今も昔も同じように)自在に読みこなせるものではない。この手の笑話には、中国人による古文読解の誤読例がいくつも紹介されており、興味深い。

②4 赤壁賦 (ほんくら教師、「赤壁の賦」を「拆壁の賦」と読み間違える)

原文

赤壁賦

庸師慣讀別字。一夜與徒講論前後赤壁兩賦。竟念賦字為賊字。適有儉兒潛伺窓外。師乃朗誦大言曰。這前面赤作拆字。壁賊呀。賊大驚。因思前一面既覺。不若往後房後穿窬而入。時已夜深。師講完。往後房就寢。既上床。復與徒論及後面赤壁賦。亦如前讀。儉兒在後房嘆息曰。我前後行藏。悉被此人識破。人家請了這。

孔子の弟子、閔子騫(びんしけん)のことであり、「夫人」[furen] (主人の妻)ではない。この文は、「閔子騫は普段はほとんど口を利かないが、口を開けば必ず的確なことを言う」という意味である。それなのに、この無知な家庭教師は「夫人」を「主人の奥さま」という意味に誤読したのである。○東家母 主人の家の奥さま(息子の母親)。和刻本『訳解笑林広記』は「東家母」[wuj]に作るが、原刊本『新編笑林広記』(京大本)により、「東家母」[muj]に改めた。○恰好 [qiyaxo] ちようど、都合よく、まさしくにぴったり。現代中国語と同じ。左訓「チャウト」(丁度)。○連 〓 さえも 〓 までも」という意味の前置詞(介詞)。しばしば「也」[ye]「都」[dou]「還」[hain]と呼ぶ。〓をつらねて」という古典訓読語とはかなりニュアンスの異なる白話語彙である。○乾淨 [ganjing] きれいに、すっかり、清潔である。現代中国語と同じ。左訓「サツハリト」(さつぱりと)。○拿進去 〓 (あちらに) 持って行きなさい。「拿」は「手に」持つ意。「去」は「去」の異体字。「進去」は、動詞の後ろに付いて、向こう側へ移動し離れていくニュアンスを添える複合方向補語。すべて現代中国語と同じ用法である。つまり、『笑林広記』に見える会話文は、きわめて口語的な表現に溢れているということである。

補注

この話は、宋元期に成立したと目される中国笑話集『笑海叢珠』(第二二話「准折学銭」[笑秀才誤字])に部分的な類話が見られるほか、『笑府』巻二(第五八話)又(読別字)、『李卓吾先生批点四書笑』、『絶纒三笑』第五九五話「大学序(一説)」(巻四、儒笑一)に類話がある。

『笑海叢珠』の日本語訳は、『中国の笑話』笑海叢珠 笑苑千金(莊司格一・清水栄吉・志村良治 訳、筑摩書房、一九六六年)三四～三六頁、『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』六八頁参照(岩波文庫本の話数表示は、本話より一話ずつずれているので、注意を要する)。さらに、『笑府』所収話は、和刻本『笑府』(半紙本、明和五年(一七六八)京都刊、A本)に収録されている。

『笑海叢珠』所収話(原本は内閣文庫蔵写本と上村幸次氏旧蔵写本、前掲書『中国の笑話』二六八頁の校訂本文によって示す)、および『笑府』所収話、和刻本『笑府』(半紙本、明和五年(一七六八)京都刊、A本)所収話、『李卓吾先生批点四書笑』所

収話、『絶纒三笑』所収話の原文は、以下の通りである。なお、「」に入れた文字は、割注である。『笑海叢珠』は『笑林広記』本文とは異なる。

『笑海叢珠』第二二話

准折学銭「笑秀才誤字」

昔有人、請秀才教子。念書多錯字。主人與之約曰、今後念書、如錯一字、定折學錢一月。直至歲晚、主人計其誤字、學錢但餘二月。因面言之。先生曰、是何言興、是何言興。主人揖之曰、且得兩无少欠。謂其以兩個言與字、皆作興字讀也。次年主人又與先生立約、如前入齋讀書。孝經第一章作曾子待、又鄉大夫章第四。忽先生之父有家書來、令其子借學錢。其子回父書云、前月誤說曾子待、今月又遇鄉大夫、所以兩月學錢主人折盡。其父見書大怒、謂其朋友曰、我子无知曾子、待它去說它。又與鄉大夫相處、如何得有學錢歸。朋友曰、必是錯讀。待鄉二字、被主人折了學錢。其父方悟、有慚色。

『笑府』第五八話(卷二・腐流部、一二三裏〜一二三丁表)

又(讀別字)

有主人以米數石。延蒙師。與之約。讀一別字。罰米一升。至散館。計一年所讀退却。僅存米二升。主人取置案上。師大失望。嘆曰。是何言興、「與」是何言興。主人頤童子曰。連二升一併拿進。

和刻本『笑府』(半紙本、明和五年(一七六八)京都刊、A本)第九話(卷上、

三丁表裏)

有主人以米數石^ト。延蒙師^ト。與之約^ト。讀^メ一別字^ヲ。罰^セ米^一一升^ト。至散館^ニ。計^リ一年所讀^ヲ。退却^シ。僅^ニ存^ス米^二二升^ト。主人取^テ置^ク案上^ニ。師大失望^シ。嘆^シ曰。是何言興^ル。「與」是何言興^ル。「與」主人頤童子^ト曰。連^シ二升^ト一併^ニ拿進^ス。

『笑府』においては、文字の読み間違え(読別字)による罰金を差し引いた給与は「米

た。家庭教師は、(あまりにも)少なくなつたその給料を見て) 怒つて言つた。

「是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(これは何(なん)のつもりきやあ。これは何(なん)のつもりきやあ。)(「訳者注: 『古文孝経』第二十章に見える言葉だが、正しくは「是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)は何(なん)の言興(げんきよう)。(なんと)いうことを言うのか。なんと)いうことを言うのか。)」と読むべきところ。無知な先生は、またしても「興」という文字を、字形の類似した「興」という文字に、二度も読み誤つたのである。)

そこで、主人は言つた。

「今また、銀二分(約二万八千円)を差し引くことになつたので、残金は一分(約一万四千円)です。」

そこへ、主人の奥さんが現れて、こう言つた。

「(先生は)一年間、(息子の教育に)苦勞してくださつたんだから、給料は半分差し引く、ということでもいいんじゃない。」

(それを聞いて)先生は、前にぐいと進み出て、感謝の気持ちを表しながら、こう言つた。

「夫人(ふじん)言(ま)わす。言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。」(訳者注: 『論語』先進篇に見える言葉だが、正しくは「夫(か)の人(ひと)であつて、「夫人(ふじん)ではない。」)

主人は言つた。

「ちょうど今の(罰金)一分(約一万四千円)も合わせて(差し引くと、給料と罰金の合計は、+一ゼロ。残金は)、きれいさっぱり(あちらへ)持つて行きなさい。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部(七丁裏〜八丁表)。『新鐫笑林広記』卷之二・腐流部(第一〇七話、一一丁表)。○束修「束脩」、弟子が師匠に支払う謝礼金。古くは『論語』述而篇七に「子(こ)曰(い)ふ。自(ら)行(く)束(す)脩(しう)以上(じやう)」。吾(われ)未(ま)嘗(た)無(な)レハ誨(こ)ト焉(や)とあり、『經典余師(論語)』(天明六年(二七八六)刊、卷二・二丁裏)に「束脩とは始めて来る時の進物なり。至(いた)つて軽薄(けいはく)なるにたとふ。束脩(すくしう)を行(な)来(き)入門(にゅうもん)とさへ唱(な)以上(じやう)の人は吾(われ)嘗(た)嘗(た)より誇(たか)ぶること無(な)事(じ)あらずと也。束脩(すくしう)は脩(しう)たるに(く)束(す)ぬるものなり」と解説される。『論語』の時代には、束(た)ねた干(か)し肉(にく)を先生(せんせい)への謝礼(しゃれい)として支払(し)つていたようだが、『笑府』の時代(明末)には「米」で、『笑林広記』の時代(清代)には「銀」で家庭教師へ

支給されていたことが窺える(『笑府』原文は補注参照)。左訓「デシイリツカヒモノ」

(弟子入り(の)遺物)。「つかひもの(遺物)」とは、贈り物・進物のこと。○別字「白字」

(第二話)、読み間違えの文字。左訓「ソラジ」(空字)。○約「相談して決める、約

束する。左訓「イヒアハセ」(言ひ合はせ)。○毎「讀(よ)ム一別字」。除(お)修(しゆ)一分(ぶん)。

一つ文字を読み間違えることに、家庭教師への謝礼を銀一分ずつ差し引く。銀一分とは、

天保一四年(一八四三)の貨幣価値によつて換算すると、約一万四千円になる(磯田

道史『武士の家計簿』(新潮社、二〇〇三年)参照)。「除」は、差し引くこと。左訓「サ

シヒク」。「修」は、「束修」(家庭教師への謝礼)のこと。左訓「ツケト、ケ」(付け

届け)。「付け届け」とは、謝礼のお金、祝儀、心付けのこと。○是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言興。『古文孝経』諫争章第二十の一節を誤読したもの。『經典余師(孝経之部)』(天

明七年(二七八七)刊、一八丁裏)による原文および訓読は、次の通り。「子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

言(ま)えば必ず中(あた)ること有り。是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。(子(こ)曰(い)ふ。參(ま)是(これ)何(なん)の言興(げんきよう)。

斷獄也。論語不云乎。朝聞盜席「道夕」死可矣。夫
 子之盜鐘「道忠」。恕而已矣。
 聖人不死。大盜不止。聖人未嘗招盜。皆引經
 斷獄者爲之也。

孔子先生の道

昔、席を盗んだ人と、鐘を盗んだ人がいて、ともに主人に裁かれた。主人は、
 席を盗んだ者を死刑にし、鐘を盗んだ者を釈放した。その理由を聞かれると、(主
 人は) こう言った。

「これは經典の言葉にもとづいて、厳しく断罪したのじゃ。『論語』に言ってい
 るではないか。『朝聞レ盗席死ストモ可ナリ矣。』(朝、席を盗んだと聞けば、殺し
 てしまっても構わない。『夫子之盗鐘。恕而已矣。』(人足が鐘を盗んだ場合、
 許してやればそれよい。)」と。(訳者注：正しくは、「夫子之道、忠恕而已矣。〔孔
 子先生の「道」というものは、ただ「忠恕(まごころをもつて、他人の気持ちと思
 いやること)』にこそある。〕という意味なのに、「道夕〔dào xī〕」を「盗席〔dào xī〕」「道
 忠〔dào zhōng〕」を「盗鐘〔dào zhōng〕」と誤読し、そのために人を殺めることになっ
 てしまったのである。)

(編者のコメント) 聖人は死に絶えていないし、大泥棒も常にいる。しかし、
 未だかつて聖人が盗みを引き起こすきっかけを作ったことなど一度もない。す
 べては「經典の言葉にもとづいて、厳しく断罪(引経断獄)」しようとした
 者が、引き起こしたことなのである(「誤読」の罪は極めて重いことを知るべ
 きである)。

なお、和刻本『訳解笑林広記』上巻は、二丁表(第四話「贄礼」の途中)から、原
 文の右脇に添えられていた句点(、)が脱落していたが、まさに「句読」の切り方が
 問題とされる本話(第二二話「読破句」七丁表)以降、再び(原則的に)原刊本に従っ
 た句点が附されている。

余説

ほんくら教師の読み違いが、人を殺したという話。ここまでくると、一知半解の
 似而非知識人は、文字通り「有害無益な大罪人」であることを、つくづく思い知らされる。

② 退束修(給料を差し引く)

原文

退束修 束修ヲ
 一師學淺。善讀二別字ヲ。主人惡レテ之ヲ。與レ師約ス。每レ讀ム一別字ヲ。除中修一
 分上。至三歲終。退除將尺。止。餘銀三分ヲ封送之。師怒テ曰ク。是何言興。
 是何言興「原與字」。主人曰ク。如今再扣二分。存銀一分ヲリ矣。東家ノ母在レリ。傍
 曰ク。一年辛苦ス。半ハ除ケハ也罷。先生近前シ。作謝曰ク。夫人不レ言ハ。言ハハ必
 有中。主人曰ク。恰好連這一分乾淨。拿進。進。公。ハ。
 書き下し文

束修を退く

一師学浅し。善く別字を読む。主人之を悪んで師と。一別字を読む毎に。修一分
 を除くと約す。歳終に至て。將に尽んとす。止。銀三分を餘す。封じて之を送る。
 師怒て曰く。は何の言興。は何の言興「原與の字」。主人曰く。如今再た二
 分を扣して。存銀一分なり。東家の母。傍に在り曰く。一年辛苦す。半ば除けば
 罷ん。先生近前し謝を作して曰く。夫人言はず。言へば必ず中る有り。主人曰く。
 恰好この一分を連て乾淨に拿し進み去らん。

現代語訳

ある先生、学識が浅く、文字の読み間違ばかりしていた。主人はこれに腹を立て、
 一文字読み間違えるごとに、給料から銀一分(約一万四千元)を差し引くことに取り
 決めた。

さて、年末になり、給料は差し引きゼロに迫ってきた。(主人は)銀三分(約
 四万二千元)しか残っていない、わずかな給料を袋に包んで(家庭教師に)差し出し

聞有教大學序者。念曰。大學之。書古之。大學所以教人之。即命鬼卒勾來。責之曰。汝何甚愛之字。我罰你做一箇猪。其人臨行。回顧曰。做猪所不敢辭。願判生南方。王問其故。對曰。南方之「猪」。強于北方之「猪」。一說。二蒙師死。見冥王。一係讀別字者。一係讀破句者。勸畢。別字者罰為狗。破句者罰為猪。別字者請為母狗。王曰。何也。曰禮記云。臨財母狗得。臨難母狗免。做猪者。請生南方云々。

和刻本『笑府』(半紙本、明和五年(一七六八)京都刊、A本)第一〇話(卷上、三丁裏)

冥王惡世多庸師。不識句讀。誤人子弟。乃私行訪之。聞下有教大學序者。念曰。大學之。書古之。大學所以教人。之。即命鬼卒勾來。責之曰。汝何甚愛之字。我罰你做一箇猪。其人臨行。回顧曰。做猪所不敢辭。願判生南方。王問其故。對曰。中庸云。南方之「猪」。強于北方之「猪」。

また、『李卓吾先生批点四書笑』(国立公文書館蔵、写本)、『絶纓三笑』所収の原文は、以下の通りである。なお、『絶纓三笑』と『笑林広記』は、基本的に本文が異なるため、ここに日本語訳(拙訳)を添えておく。「」内の文字は、原刊本に附された割注である。『絶纓三笑』の本文は、『笑府』の本文にかなり近い(『笑府』第五九話「読破句」および第五八話「又(読別字)」参照)。

『李卓吾先生批点四書笑』(国立公文書館蔵、写本)その一二
 一 係讀破句者勸畢。別字者罰為狗。破句者罰
 一 係讀破句者勸畢。別字者罰為狗。破句者罰
 為猪。別字者。曰狗不敢辭。願為母狗。王曰。何也。
 曰。禮記云。臨財母狗「苟」得。臨難母狗「苟」免。破句

者曰。猪不敢辭。願為南方猪。王曰何也。曰。中庸云。南方猪「之」強与北方猪「之」。

『李卓吾先生批点四書笑』(国立公文書館蔵、写本)その二
 昔有一盜蒞者。一盜鐘者。決於主者。主者問盜蒞者。以大辟。而釋盜鐘者。人問其故。曰。此引經斷獄也。論語不云乎。朝聞盜蒞「道夕」死可矣。夫子之盜鐘「道忠」恕而已矣。
 聖人不死。大盜不止。聖人未嘗招盜。皆引經斷獄者為之也

『絶纓三笑』第五九五話(卷四、儒笑一)

大學序

冥王惡世多庸師。不識句讀。誤人子弟。乃私行訪之。聞有教大學序者。讀曰。大學之「句」。書古之「句」。大學所以教人之。即命鬼卒勾來責之曰。汝何甚愛之字。罰你做一箇猪。其人臨行回顧曰。做猪所不敢辭。願判生南方。王問其故。對曰。南方之「猪」。強与北方之「猪」。

一 說二蒙師死見冥王。一 係讀別字者。一 係讀破句者。勸畢。別字者罰為狗。破句者罰為猪。別字者請為母狗。王曰。何也。曰。禮記云。臨財母狗「狗」得。臨難母狗「狗」免。做猪請生南方。云云。○有主人以米數石延蒙師。與之約。讀一別字。罰米一升。至散館。計一年所讀。退卻止存米二升耳。主人取置案上。師大失望。歎曰。是何言。興是何言。蓋誤與為興也。主人願童子曰。連二升一并拿進。下土曰。生前。既已退卻。死後或無果報。○又曰。親當作新。

と。輪廻転生。左訓「ゴフヲミセ」（業を見せ）前世の悪業によって、つまらぬものに生まれ変わり、次の世で恥をさらすこと。「業を曝す」とも言う。○判判判決を下す、裁きを下す。左訓「サバイテ」（裁いて）。○狗「ハハ」做「コト」ノ「母狗」ト「イヌ」に生まれ変わるのなら、お願いですから、雌イヌにしてください。和刻本は「母狗[mūgōu]」を「母狗[wūgōu]」に作るが、原刊本（京都大学附属図書館蔵、乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊）により改めた。ここは「母狗（雌イヌ）」と理解すべきところ。○南方之「猪全音」。強與北方之「猪」。○「中庸章句」第十章に見える文章を誤読したもの（「破句」（句切りのミス）＋「念白字」（文字の読み違い）。本来の訓読と解釈は次の通り（訓点は『經典余師』、解釈は拙訳による）。「南方、之強與。北方、之強與。」（お前が言っているのは）南方の強さのことか、それとも北方の強さのことか。それに対して、この「ほんくら教師」は、文の句切りを誤ったうえ、さらに「之」の「[zi]」を「猪」[zi]、「與」を「與」と誤読し、「南方、之。強與。北方、之。」（南方のブタは、北方のブタよりも強い。）と解釈してしまったのである。○又問「母狗」為何「閻魔大王は」雌イヌに生まれ変わりたいというのは、なぜなのじゃ」と重ねて聞いた。和刻本は「母狗」に誤刻しているが、原刊本により「母狗」に改めた。○曲禮「礼記」冒頭の篇名。○臨「テハ」財「母」苟「狗」全音。得。臨「テハ」難「母」苟「狗」免。○「礼記」曲礼篇の文章を誤読したもの。本来は次のように訓読する。「臨「テハ」財「母」苟「狗」得。臨「テハ」難「母」苟「免」。「（財物に関して）は、かりそめにもごまかして自分のものにしたりしてはいけない。困難に直面したときも、すこしも一時逃れをしてはならない。」「ほんくら教師」は、「母狗[wūgōu]」を「母狗[mūgōu]」と読み違え、「雌イヌは財産を獲得する。雌イヌは災難を免れる。」と解釈し、だからこそ、生まれ変わるなら良いことづくめの「雌イヌ」になりたいと考えたのである。すべて経文に対する荒唐無稽な解釈である。

補注

この話は、宋元期に成立したと目される中国笑話集『笑海叢珠』（第七話「笑官引法書」）に部分的な類話が見られるほか、『李卓吾先生批点四書笑』（二話）、『笑府』卷二（第五九話「読破句」、同「一説」）、『絶纓三笑』卷四（第五九話「大学序」（儒笑一）、同「一説」）（儒笑一）、同第六二八話「夫子之道」（儒笑三四）に類話がある。

『笑海叢珠』の日本語訳は、『中国の笑話（笑海叢珠 笑苑千金）』（莊司格一・清水栄吉・志村良治 訳、筑摩書房、一九六六年）二七頁、『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』六八〜七〇頁を参照。

また、『笑海叢珠』所収話は、和刻本『鶏窓解頤』（宝暦二年（一七五二）刊、寛政九年（一七九七）に『開口新話』として改題再板）に収録され、『笑府』所収話は、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊、A本）に収録されている。

『笑海叢珠』所収話の原文、和刻本『鶏窓解頤』（改題本『開口新話』、京都大学文学部図書室・頼原文庫蔵）、『笑府』（筑波大学中央図書館蔵本）、和刻本『笑府（A本）』（京都大学附属図書館蔵本）の原文は、以下の通りである。『笑海叢珠』の翻刻は、内閣文庫蔵写本と上村幸次氏旧蔵写本によって莊司格一・清水栄吉・志村良治の三氏が校訂したものである（『中国の笑話』二六六頁所収）。原本との文字の異同は、同書に詳細に注記されているが、ここでは割愛する。

『笑海叢珠』第七話

笑官引法書

昔有一人、宿于店中。次早出店、盜主人席而去。主人捕捉。因行到官。官員處盜席者以死罪。同官皆曰、恐无此法。官員曰、法書上正是合處死。故曰、朝聞道、夕死可矣。

和刻本『鶏窓解頤』（改題本『開口新話』）第五〇話（二二丁裏）

官引法書

昔有二人、宿于店中。次早出店、盜主人席而去。主人捕捉。因行到官。官員處盜席者以死罪。同官皆曰、恐无此法。官員曰、法書上正是合處死。故曰、朝聞道、夕死可矣。

『笑府』第五九話（卷二・腐流部、一三丁表裏）

讀破句

冥王惡世多庸師。不識句讀。誤人子弟。乃私行訪之。

「鐘 [zhōng]」と読み間違え、「鐘を盗んだ人足は、許してやってもよい」などと、誤った解釈をしたのである。」

そこで役人は、ついにこの泥棒を釈放した。

また、ある日、(こんどは) 蓆を盗んだ泥棒を捕まえ、(役人のところへ) 引つ立てた。そこでこの役人、またしても(ほんくら教師に) 相談した。すると、先生は(なんと) こう言った。

〔「論語」里仁篇に〕「朝に蓆を盗むと聞けば、死すとも可なり。」と言うではございせんか。(つまり、蓆泥棒は死刑にすればよいのです。)(訳者注：正しくは「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり。)(自分の理想とする「道」が明確に理解できた。暁には、私はその日のうちに、すぐに死んでしまっても構わないくらい、うれしいのだ) という意味なのに、ほんくら教師は「道 [dào]」を「盗む [dào]」、「夕 [xī]」を「蓆 [xī]」と読み間違えて、「蓆泥棒は殺してもよい」などと、とんでもない誤った解釈を導き出してしまったのである。)

そして(ほんくら教師の) 役人は、即座に蓆泥棒を棒たたきの刑に処し、殴り殺してしまったのである。

ちょうどそのとき、地獄の閻魔大王が、こっそり(人間界を) 視察し、(今回の取り調べの) 実情を知ることと相なった。閻魔大王は、すぐに鬼の獄卒に命じ、(ほんくら教師を) 引つ捕らえ、口汚く罵って、こう言った。

「文章も碌すっぽ読めない出来損ないのすつとこどっこい！ 貴様は人を騙して家庭教師の給金をネコババし、若い子弟の将来を台無しにした。貴様のその罪は、重い。こやつをつまみ出して、ブタかイヌに生まれ変わらせてしまえ。」

すると先生は、再三嘆願して、こう言った。

「ブタやイヌになることは、それはもう仕方ないことだと思っております。ですが、ブタになるならば、ぜひとも南方に生まれさせてくださいませ。イヌに生まれ変わる場合は、なにとぞ雌イヌにして頂きますよう、お願い申し上げます。」

閻魔大王は、「それはまた、どうしてじゃ。」と訊ねた。ほんくら教師は、答えて言った。

〔「中庸章句」第十章に〕「南方之強、与北方之強、南方のブタは、北方のブタよりも強い。」と言うではございせんか。(だから、どうせブタになるのなら、より強い「南方のブタ」になりたいと思うのです。)(訳者注：正しくは、「南方

之強与。北方之強与。」(子路が言っているのは) 南方の強さか、それとも北方の強さか。) という意味なのに、ほんくら教師は「之 [zhi]」を「猪 [zhu]」、「与」を「与」と読み違え、どうせ生まれ変わるならば、より強い「南方のブタ」になりたいなどと、馬鹿げたことを言ったのである。)

閻魔大王は、こんどは「雌イヌになりたい」というのは、どうしてなのじゃ。」と訊ねてみた。ほんくら教師は、答えて言った。

〔「礼記」曲礼篇に〕「臨レテハ財ニ母苟得。臨レテハ難ニ母苟免。」と言うではございせんか。(財産を手に入れるのも雌イヌですし、災難が降りかかったときにも、助かるのは雌イヌなのです。だから私は、どうせ畜生道に落ちるのなら、いつそのこと雌イヌになりたいと思うのです。)(訳者注：正しくは、『臨レテハ財ニ母ニ苟得』ではならない。困難に直面しても、一時逃れをしてはならない。) という意味なのに、「母ニ苟ニ母 [wugou]」を「母狗 [mugou]」と読み違え、どうせ生まれ変わるならば、雌イヌにしてほしいなどと、荒唐無稽なことを言ったのである。)

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部(七丁表裏)。『新鐫笑林広記』卷之二・腐流部(第一〇六話、一〇丁裏―一一丁表)。なお、本話に附された割注(「」で表記)は、遠山荷塘によるものではなく、すべて中国刊本に見える原注である。○庸師はほんくら教師。「庸 [yong]」は、「平凡な」「月並みな」「ありきたりな」という意味。否定的に用いる。ちなみに「數医者」のことを「庸医 [yong yi]」という。○破句文章を切つてはいけない箇所を区切ること。左訓「クギリチカイ」(句切り違い)。○念(声に出して) 読む。左訓「ヨム」。○白字は誤字、読み間違えの文字。同音語、類語、または字形の類似による読み間違えをいう。本話では、音による読み間違えとして「道 [dao]」「盜 [dao]」「忠 [zhong]」「鐘 [zhong]」「夕 [xi]」「蓆 [xi]」字形の類似による読み間違えとして「母苟 [wugou]」「母狗 [mugou]」が挙げられている。左訓「ソラジ」(空字)。なお、原刊本『笑府』(内閣文庫他蔵) 第五七話(卷二、一二丁裏)「讀別字」の割注に「呉語謂之白字」(呉方言では「別字」のことを「白字」という)とある。また、『訳解笑林広記』第二三話「退束修」にも「別字」による読

る。せつかく腹一杯食べさせてやったのに、尻から屁を出すとは何事か、出した分はきつちり飲みこんでもらいましょう、というもの。かなり下ががっている。古今東西、必ず笑話には下ネタが付いて回る。

ただし、下世話な咄にしては、なかなか気が利いている。

②読破句(とんでもない読み違い)

原文

讀破句

庸師慣讀^二破句^一。又念^二白字^一。一日訓徒^二。教^二大學序^一。念^二云^一。大學之。書古^一之。大學所以教^一人之。主人知覺^二。怒^二而逐^レ之^一。復被^二一^一。蔭官延^レ請^レ。入^レ幕^一。官不^レ識^レ律令^一。每事詢^二之^一。館師^二。一日^一。巡捕拿^二一^一。盜^レ鐘者^二。至^一。官問^レ何以治^レ之^一。師曰^二。夫子之道^一「盜音全」忠^二「鐘音全」^一。恕^二而已^一矣。官遂^レ釋^レ放^一。又一日獲^二一^一。盜^レ席者^二。至^一。官又問^レ師曰^二。朝聞^レ道^一「盜音全」夕^二「席音全」^一。死可^レ矣。官即^レ將^二盜^レ席者^一立^二杖^一下^二。適^二冥王私^一行^二夕^一。察訪^レ得^レ寔^一。即命^二鬼判^一。拿来^レ痛罵^レ。曰^二。不通^一的畜生。你騙^二シテ人^一。館殺^レ。悞^二人^一子弟^一。其罪不^レ小^一。摘^レ往^二輪廻^一。二^一。衣變^二猪狗^一。師再^レ三哀^一告^レ曰^二。做^二猪狗^一固^レ不^レ敢^レ辭^一。但猪^レ要^二下^一。判^二生^一南方^二。狗^レ再^レ三哀^一一^レ母狗^上。王問^レ何^レ故^一。答^レ曰^二。南方^一之^レ「猪音全」。強^レ與^二北方^一之^レ「猪音全」。又問^レ母狗^上。為^レ何^一。答^レ曰^二。曲禮^一云^二。臨^レ財^二母苟^一「狗音全」得^レ。臨^レ難^二母苟^一「狗免^レ」。

書き下し文

破句を読む

庸師破句を読むことに慣る。又白字を念ず。一日徒に訓ゆ。大学の序を教ゆ。念じて云く。大学之。書古之。大学所以教人之。主人知覚して。怒て之を逐ふ。復た一蔭官延き請ふて幕に入るを被る。官律令を識らず。事毎に之を館師に詢ふ。一日巡捕一の鐘を盗む者を拿して至る。官問ふ何を以て之を治ん。師曰く。夫子の忠「鐘と同音」を道む「盗と音同じ」。恕せんのみ。官遂に釈

放す。又一日一の鐘を盗む者を獲て至る。官又問ふ。師曰く。朝に夕「席」と同音」を道む「盗と同音」と聞けば。死すとも可なり。官即ち席を盗む者を將て立ちに杖下に斃す。適たま冥王私かに行て、察訪し寔を得たり。即ち鬼判に命じて拿へ来て痛罵して曰く。不通の畜生。你人の館殺を騙して。人の子弟を悞る。其の罪小ならず。摘して輪廻に往き去て猪狗に變せしむと。師再三哀告して曰く。猪狗と做るは固より敢て辞せず。但だ猪なれば判じて南方に生ぜしめ。狗なれば乞ふ一の母狗と做らんことを要す。王問ふ何故ぞ。答て曰く。南方の之「猪と同音」は。北方の之「猪」よりも強し。又問ふ母狗なれば為何。答て曰く。曲禮に云く。財に臨んでは母苟「狗と同音」得る。難に臨ては母苟「狗」免る。

現代語訳

ぼんくら教師、しょっちゅう文章の切り方を間違えたり、文字を読み間違えたりした。ある日、弟子に『大学章句序』を教えているとき、「大学之。書古之。大学所以教人之。(大学)ブタ、書古ブタ、大学・理由・教人ブタ。」

と(声に出して)読んだ。主人は、これを聞いて怒り狂い、この家庭教師をクビにした。ところが、このぼんくらな家庭教師は、(なぜか)親の七光りで官職に就いた役人に招聘され、その相談役に就任した。役人は、法律の知識がなかったので、事あるごとに、(ブレイン役の)この家庭教師に相談した。

ある日、市内警備の捕り手が、釣り鐘を盗んだ泥棒を捕まえ、(役人のところへ)やって来た。この役人、

「これは、どのようにに処罰したらよいだろうね。」

と、先生に質問した。先生は、

「『論語』里仁篇に『夫子の鐘を盗むは。恕せんのみ。』と言うではございませぬか。(つまり、鐘泥棒は許してあげてもよいのです。)(訳者注:正しくは「夫子の道は、忠恕のみ」(孔子先生の道は、「まごころ」をもって他人に思いやりの気持ちを示すこと、それだけである。」「まごころ」こそが、人間として最も大切な道である。))という意味なのに、ぼんくら教師は、「道[dào]」を「盗む[dào]」、「忠[zhōng]」を

字で記すことは珍しい)。○怪_ぶ咎_{とが}める、責める。現代中国語と同じ。古典漢文や日本語で使用される「あやしむ」とは異なる。『笑府』所収の類話(第六七話「兄弟延師」)は、「咎供給之不豊」に作る。○師輪至日_{しりんしじつ}先生の面倒を見る順番が回ってきた、その日に。「輪」は、番がまわってくる」意の動詞。現代中国語と同じ。○舛_{ひら}両_{りやう} [mǐnliáng] 目方、重さ。「舛」は「筋」の異体字、「斤」と同音。「秤舛_{しん}両」で「重さを量る」意、左訓「メカタニカケル」(目方にかける)。○将交師于兄_{しやうかうしにけい}先生を兄に渡そうとする。「交」、左訓「ワタサント」(渡さんと)。○飽_あ飧_{しん} 御馳走をお腹いっぱい食べる。「飧」は「餐」の異体字。○撒_さ一_{いつ}屁_ぺ 一発、放つ。左訓「ヘラヒル」(屁を放る)。○秤上買賣_{しやうじやうばいばい} 重さで物の値段が決まる商売。左訓「ハカリメノ アキナイ」(秤目の商い)。○輕易_{じやうい} 軽々しく、不注意に、簡単に。現代中国語と同じ。左訓「タヤスク」。○撒_さ出_{しゅつ} 放り出す、屁をこく。左訓「ヒリダス」。○説_{せつ}不得_{ふとく} 口に出すのが憚られる、口に出せない、言えない。「説」は「説」の異体字。左訓「イヒハサレトモ」(言ひはされねども)。○原替我吃了_{げんかいはくじ} 下駄(お腹)から体の外に出してしまったものを) 元通りに(口から入れて) お腹のなかへ飲み下してしまいなさい、という意味。「替我」は現代中国語「給我」と同じく、直訳は「私のために(〜する)」。必ずしも「私の代わりに」という意味にはならない。遠山荷塘は「タメニ」という右傍訓を附す。「去」は「去」の異体字。「下去」は、下の方へ向かって離れていくニュアンスを添える複合方向補語。「了」は「了」してしまふ」意を表すアスペクト助詞。現代中国語と同じ。「吃了下去_{じくじしやうき}、左訓「ノミコンデクダサレ」(飲み込んでください)。「笑府」第六七話にも同文「原替我喫了下去」とあるが、岩波文庫本(松枝茂夫氏)の翻訳「うちの物を食って行ったのに」(上巻、七六頁)は誤訳。「言にくいことだが(説不得)」「元通り(おならを口から) 飲み込んでしまってください」という意味でなければ、この咄は落ちない。『絶纓三笑』所収の類話のタイトルが「師吃屁(先生がおならを食べる)」となっていることも、そのことを示している。

補注

この話は、『笑府』巻二(第六七話「兄弟延師」)および『絶纓三笑』第一八三話「師吃屁」(巻二、時笑・舛語九三)に類話があり、『笑府』と『笑林広記』はほぼ同文である。

『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』七六頁参照。ただし、松枝氏の翻

訳にはオチの部分に誤訳があるので注意したい。『絶纓三笑』は、『笑林広記』とほぼ同文と言えるが、例によって編者のコメント(「評語」)は他書にないものである。また、『絶纓三笑』の標題は他書とは異なる。なお、和刻本『笑府』に、この話の類話はない。『笑府』『絶纓三笑』収録話の原文は、以下の通りである。『絶纓三笑』の「評語」には拙訳を添える。

『笑府』第六七話(巻二・腐流部、一六丁表裏)

兄弟延師

有兄弟二房。共延一師。分班供給。每交班。必互嫌師瘦。咎供給之不豊。于是兄弟相约。师初至。即称斤两、以為交班肥瘦之驗。一日弟将交師于兄。乃令師飽餐而去。既上秤。師偶撒一屁。乃咎之曰。秤上買賣。豈可撒出。説不得。原替我喫了下去。

『絶纓三笑』第一八三話(巻二、時笑・舛語九三)

師吃屁

有兄弟共延師。分班供給。每交班。互嫌師瘦。於是相約稱斤兩。以為交班肥瘦之驗。一日弟供滿。交師于兄。既上秤。師偶撒一屁。乃咎之曰。秤上買賣。豈可撒出。説不得。原替我喫了下去。

先生一年不知多少束脩。身體不知多少重。歸除一算。便知多少價錢一斤也。

(編者のコメント) 先生は一年にどれくらいの謝礼を受け取っていたか分からないし、体重もどれくらいの重さだったのかは分からないが、謝礼を体重で割り算してみれば、一斤(約六〇〇グラム)当たり、どれくらいの給金をもらっていたかが分かるというわけである。

余説

この話は、貧乏書生を二人の兄弟が食べさせている話だが、笑いのツボはオチにあ

み上げ、凶作に備える。事前に準備することの喩え。「養児防老、積穀防饑」(子どもを育てて老後に備え、穀物を蓄えて飢饉に備える) という八字の成語として用いられる。貧乏書生のこじつけた解釈は、この成語に基づいている。

補注

原本『笑府』『絶纓三笑』ともに類話はなく、和刻本の中国笑話集等にも採録されていない。

余説

前話「講書」と同じく、貧乏書生(私塾の家庭教師)が勤め先の主人に気に入られようとして、むやみやたらと教え子を褒めちぎる話である。話のオチは、「割稻(稲を刈る)」という二字に付けた「行房(房事を行う)」という語、この下ネタがらみの禁句までも、貧乏書生は(金に目がくらんで)絶賛しているところにある。教え子が先生に向かつて「行房」と答えたのは、現代日本風に言い替えれば、「性交」もしくは、そのものズバリ「セックス」という語を口にしたに等しい。教育の場における学生の発言として、不適切、不謹慎、不真面目きわまるものと言わなければならない。雇い主が「大いに怒」ったのは、むしろ当然だったのである。「屁理屈とチューインガムは、どこにでもくつつく」と言われるが、本話のポイントも、そこにある。ただし、「養児防老」「積穀防饑」という成語を用いた、このこじつけ解釈は、なかなか気の利いたものである。

② 兄弟延師(兄弟が家庭教師を招く)

原文

兄弟延師

有兄弟兩人、共延一師、分班供給、每二交班、必互嫌師、瘦、怪、供給之不豐、于是兄弟相約、師輪至日、即秤兩、以為交班、肥、瘦之驗、一日、弟將交師于兄、乃令師飽、而去、既上秤、師偶撒一屁、乃答之曰、秤上買賣、豈可輕易撒出、說不脫、得、原替我吃了下、忒、

書き下し文

兄弟師を延く

兄弟兩人有り、共に一師を延く、班を分て供給す、交班する毎に、必ず互ひに師の瘦を嫌ひ、供給の豊ならざるを怪む、是に于て兄弟相約して、師輪し至る日、即ち筋兩を秤して、以て交班肥瘦の驗を為す、一日、弟、將に師を兄に交せんとす、乃ち師に飽餐して去らしむ、既に秤に上す、師偶たま一屁を撒す、乃ち之を咎めて曰く、秤上の買賣、豈に輕易に撒出す、説き得ざれども、原より我が替に吃し下し去れ、

現代語訳

二人の兄弟、共同で一人の先生を招き、(先生の)食事などは、交代で面倒をみることにした。引き渡しの際には、必ず決まって二人とも、先生の体重が軽くなっていることに文句を言い、食事の世話が十分ではないと言って責め立てた。

そこで、兄弟は相談して、先生を受け入れる順番がまわってくる日に、体重計で重さを量り、交代時の体重の記録を、証拠として残しておくことにした。

ある日、弟が先生を兄に引き渡すにあたり、先生に御馳走をお腹いっぱい食べさせてから、(兄のところへ)連れて行った。それなのに先生は、体重計の上に載ったとき、思わず一発、屁をこいた。(弟は、それを見て、先生を)咎めてこう言った。

「目方何キロかで値段が決まる商売なんや! 何を軽々しく屁えこいとんねん! 口には出しにくいことやけど、きっちり元通り(出したもんは、耳そろえて)飲みこんでもらいませ!」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・腐流部(六丁裏)、『新鐫笑林広記』巻之二・腐流部(第一〇五話、一〇丁表裏)。○兄弟延師(兄弟が先生を招く)。「延」[yan]は「招く」意。○分班(交代する)代わる代わる、交代に。本来は、「仕事の分担チーム(班)を(いくつかに)分ける」意。左訓「カワリバンニ(代わり番に)」。○供給(食料などを提供する)。左訓「マカナイスル」(賄いする)。○交班(家庭教師に食事を与える仕事を相手に)引き渡す、交代する。「交」[iao]は「相手に」渡す意。左訓「交代」(左訓を漢

⑳ 師贖徒 (先生、教え子を褒めちぎる)

原文

師贖徒

館師欲シテ為ニ固館ノ計ヲ、毎ニ贖ニ學生ノ聰明ヲ、東家不レ信セ、命ニテ當面ニ對課セシム、師曰ク蟹、學生對ニテ曰ク傘、師贖レシテ之ヲ不レ己マ、東翁不レ解セ、師曰ク、我レ有ニ隱意ニ、蟹乃チ横行ノ物、令レ郎對レテ傘ト有ニ獨立ノ之意、豈ニ不レ絶妙ニ、東翁又命ニテ對ニテ兩字課ニ、師曰ク割稻ヲ、學生曰ク行房ヲ、師又贖レシテ不レ己マ、東家大ニ怒ル、師曰ク、此對也、有ニ隱意、我レ出ニ割稻者、乃チ積穀ヲ防レテ饑、他對ニ行房者、乃チ養兒ヲ待レテ老ヲ、

書き下し文

師徒を贖す

館師固館の計を為さんと欲して、毎に学生の聰明を贖す、東家信せず、命じて当面に對課せしむ、師曰く蟹、學生對して曰く傘、師之を贖して己まず、東翁解せず、師曰く、我隱意有り、蟹は乃ち横行の物、令郎傘と對す、獨立の意有り、豈に絶妙にあらずや、東翁又命じて兩字課を對せしむ、師曰く稲を割る、學生曰く房を行ふ、師又贖して己まず、東家大に怒る、師曰く、此の對も也、た隱意有り、我割稻を出す者は、乃ち穀を積み饑を防ぐ、他行房と對する者は、乃ち兒を養ひ老を待するなり、

現代語訳

私塾の教師、雇い主の家にできるだけ長く居続けたいと思い、いつも教え子を「かしこい」「すごい」と褒めちぎった。ところが、家の主人はそんなことを信じない。それなら自分の目の前で、對句を付けてみると言う。そこで、先生が「蟹」と言うと、教え子は「傘」と付けた。先生は「かしこい」「すごい」と贊嘆して止まなかったが、ご主人さまの方はさっぱり訳が分からない。先生は言う。

「私が出した對句の題には、隠された意味があるのです。つまり『蟹』とは『横に歩くもの』なのです。だから御息さまは、これに『傘』と付けたのです。『傘』には『一本すくと立つ』という意味があるからです(訳者注:「横方向に移動する『蟹』」と「縦方向に立ちつくす『傘』」の對)。この見事な對句、絶妙というべきでは

ありませんか。ああ。」

御主人は、こんどは二字の對句を息子に作らせてみると言った。そこで、先生が「割稻(稲を刈る)」と言うと、教え子は「行房(房事を行う)男女が交わる)」と付けた。先生は、またしても「かしこい」「すごい」と贊嘆して止まない。ところが、家の主人はかんかん怒っている。先生は言う。

「この對句にも、隠れた意味があるのです。私が「割稻(稲を刈る)」と言ったのは、『穀物を積み上げ、飢饉に備える』という意味です。そして御息さまは、それに対して「行房(房事を行う)男女が交わる)」と付けました。それはつまり、『子どもを作つて、老後に備える』ということなのです(訳者注:「稲を刈つて、飢饉に備える『割稻』と『子どもを作つて、老後に備える『行房』の對。』」

注

○「訳解笑林広記」卷之上・腐流部(六丁表裏)。「新鐫笑林広記」卷之二・腐流部(第一〇一話、九丁表裏)。「師贖徒」先生が弟子を褒める。「贖」は「贖」の本字。「贖」、左訓「ホメル」。○固館「家庭教師が勤め先の家に長期間居続けること。「館」は「館」の異体字。私塾の家庭教師という職は、科擧の上級試験を控えた貧乏書生にとつて、きわめて重要な生活の糧であった。左訓「イツマテモ館ニナル(いつまでも館に居る)」。○學生「教え子。左訓「デシ(弟子)」。○東家「雇い主、主人。左訓「シユジン(主人)」。○當面「目の前で、その場で。左訓「メノマヘデ(目の前で)」。○對課「對句を作る授業。教師が提出した言葉に對して、同じ文字数の言葉を返す。一字句、二字句から始まり、五字句、七字句に至る。例えば、「山(一字の名詞)には「海」「水」など(一字の名詞)を付け(蔡元培『我在教育界的經驗』)、「一雙征雁向南飛(七字句)には「兩隻燒鷺朝北走(七字句)を付ける(『西湖二集』第四卷「愚郡守玉殿生春」)。○東翁「東家(雇い主)の敬称、御主人さま。左訓「シユジン(主人)」。○隱意「はつきりとは示さないが、間接的、比喩的に示された意味。秘められた意味、隠された意味のこと。○絶妙「絶妙。「妙」は「妙」と同字(『康熙字典』)」。○對兩字課「二字の對句を付ける。「對」は「對」の正字(旧字体)。「對(一字)課」は「一字の對句を付ける」意、「對兩字課」は「二字の對句を付ける」意。○割稻「稲を刈ること。○行房「房事を行うこと、男女が交わること。○積穀防饑「穀物を積

先生は言った。

「この講義内容は、(よそとは全然) 違うんだぞ。この私の余姚よようの家に代々伝わる秘伝ひでんの読み方なのじゃ(だから、心して聞け)。そもそも、書を読むときは、前後の文章をしつかりと読まねばならぬ。」

教え子は言った。

「前の部分はどうな文章ですか。」

先生が言う。

「前の文は『郷人きょうじん 儼おんやうす』とある。季康きこう子は大夫、孔子は大聖人である。大夫が大聖人に薬を贈るとするのは、並大抵みなたいていのことじゃない。そして田舎の人は、みな孔子様のために薬を練り合わせて差し上げる、というのじゃから、丸薬に決まってるのじゃ。」

教え子は言う。

「そういうことなら、丸薬で決まりですね。」

先生は言った。

「いやいや、そうでもないのじゃ。まだその後ろを読まなければならん。」

教え子は言った。

「次はどのような文ですか。」

「次は『厩うまや 焚やけたり』とある。子どもがうっかり(火の扱いを誤って)馬屋まで焼いてしまったということじゃ。つまり、それは煎じ薬でもあったというわけじゃ。」

教え子は言う。

「丸薬でもあり、煎じ薬でもあったと。さてそういう場合、どのように作文すればよいのでしょうか。」

先生は言った。

「その質問は、さらに一段と訝あやえわたつとるな。いつそのこと、お前に秘法を伝授してやろうかしら。文章を作るときは、『二股いづく丸薬、一股いづく煎薬、両股りやう丸薬』とすればよい。二つの言い方がどちらも兼ね備わっていて、はじめてその意味が十全なものになるのじゃ。さて、お前はちゃんとお父様に束修を増額するよう言ってくれないといかんぞ。それが肝心なことじゃ。」

(編者のコメント)前話(第六五七話)「適可而止」評文)において「衣鉢いぼく」(代々師匠から弟子へと受け継がれる奥義)と呼ばれていたものが、本話における「心訣しんけつ」(家伝の秘法)である。書物の読み方、文章の作り方、いずれにおいても要点を尽くした至極の理は、ここに述べられていることに他ならない。束修は、増額してもよろしかろう。

和刻本『笑府』(A本)第一話(卷上、腐流)

一先一生講レ書ヲ、至三康一子饋レ藥ヲ、徒問二是煎藥是丸藥一、先生

向二主人一誇レ獎シテ曰ク、非レ令レ郎ノ美質ニ不能問、非レ學生博學ニ

不能答、上節郷人儼ノ儼ノ的ニ是自然ニ是丸藥、下節又

是煎藥、不三是用二爐火一、如何シテ就チ厩焚ケ起來シ、

余説

またしても、私塾の家庭教師をバカにした話。この話のポイントは、次の二点。一つ目は、雇い主に気に入られようとして、教え子を褒めちぎり、御主人様に媚びへつらおうとする、雇われ教師のさもしさ。二つ目は、経書を俗語で曲解しようとする、学者としての愚かしさ。

『論語』本文は、孔子に関わる言葉を集めた断片的な孔子語録であり、前後の断章がそれぞれ緊密に意味的に結びついていないものではない。朱子学者ならば、それを朱子の切り方と解釈に従って理解するのが正当とされた。それをこの家庭教師は、無理に俗語を用いて読み解こうとしており、それを「博学」の自分だからこそできる解釈だと自慢しているのである。ちなみに、『論語』郷党篇に見える「薬」が、「丸薬」(練つて丸めた錠剤)であると同時に「煎じ薬」(煮詰めた液体の飲み薬)でもあるというこの解釈(「固体であると同時に液体である」)は、言うまでもなく、それ自体が矛盾である。

ある。薬を贈られたすぐ後に火事が起きているのだから、火を使って薬を煎じていたのだからという、穿った経書解釈を行っているのである。この解釈が荒唐無稽なものであることは言うまでもない。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻四・儒笑六三「康子饋藥」（第六五七話）に類話がある。中国刊本『笑府』に類話はないが、和刻本『笑府』（明和五年（一七六八）九月、京都刊、半紙本二巻一冊）には、『笑林広記』所収の本話が収録されている。

なお、『笑林広記』所収のテキストは、すでに松枝茂夫氏と武藤禎夫氏による翻訳が備わっている（東洋文庫24『中国笑話選—江戸小咄との交わり—』、平凡社、一九六四年八月、二六四頁）。「注」の記述にやや不正確なところがある（「攤 [nuo]」を「攤 [nu]」に誤る）。この誤りは、和刻本『笑府』に見える「攤的」に附された左訓「ヒロゲタハ」に影響されたのであろう。字形のよく似た「攤 [nu]」は「広く並べる」意だが、ここは同音語 [nu]（「攤（おにやらい）」+「挪（動かす↓丸薬）」）による誤読でなければ意味を成さない。したがって、和刻本『笑府』の左訓「ヒロゲタハ」も誤訓である。『訳解笑林広記』（遠山荷塘）は、「攤的」に適切な左訓「マルメル」を附す。遠山荷塘は、さらに「割注」として「攤（挪同音）」とも記し、無学な家庭教師が經典中の文字「攤 [nu]」を同音の俗語「挪 [nu]」（指を動かして練り合わせる）にこじつけて曲解していることを、しっかりと明記しておきたかったところである。

また、東洋文庫本に「ところが下節のは煎薬です」とあるも、適切な翻訳ではない。原文は「下節又是煎薬」、「又」という副詞は「〜であると同時に」でもある「意を表す」。この教師は、『論語』に出てくる薬が、丸薬であると同時に煎薬でもある、という辻褃の合わない矛盾した説明をしているのである。「上節のは丸薬、ところが下節のは煎薬である」と言っているのではない。そのことは、『絶纓三笑』の類話を見れば、さらに明らかになる。

『絶纓三笑』および和刻本『笑府』所収の原文は、以下の通りである。『絶纓三笑』と『笑林広記』は、本文にかなり異同があるため、日本語訳（拙訳）も添えておく。

『絶纓三笑』第六五七話（巻四、儒笑六三）

○康子饋藥

一餘姚師講康子餽藥。學徒問曰。藥是丸藥煎。師喜曰。此問甚聰明。汝可與父親說。增些束修。我纔說與汝。徒曰。講了去說就是。師曰。此講法不同。乃我餘姚人傳家心訣也。凡看書要看上下文。徒曰。上文云何。曰。上文是鄉人攤。康子是大夫。孔子是大聖。大夫餽藥與大聖。是急猛事。合鄉之人。都來替他搓攤搓攤。可不是丸藥。徒曰。這等是丸藥了。師曰。又不。還要看下文。徒曰。下文云何。曰。下文是厩焚。童子不小心。延燒馬房。這又是煎藥。徒曰。又是丸藥。又是煎藥。如何作文。師曰。此問更聰明。索性把心訣傳與汝。作文時一股丸藥。一股煎藥。兩股丸藥。兩股煎藥。二說相兼。其義始備。卻須對父親說增束修要緊。

前所云衣鉢。即此師所云心訣也。看書之法。作文之法。要之至理。不外乎是。束修宜增。

○季康子が薬を贈る。

余姚（浙江省東部）出身の先生が、「康子薬を饋る」（『論語』郷党篇）という本文を講義したところ、教え子が質問した。

「その薬は丸薬ですか、それとも煎じ薬ですか。」

先生は喜んで言った。

「このような質問をするとは、すばらしく頭がよいではないか。お父さんにもつと束修（謝礼のお金）を増やすように言ってくれるなら、私はお前に（その質問の答えを）教えてあげよう。」

教え子は言った。

「教えてくれたら（お父さんに）言っておあげる。約束するよ。」

起シ来、

書き下し文

書を講ず「呆館師 長久館に坐せんと欲して 主人に趨奉するを嘲するなり」
一先生 書を講ず、康子 薬を饋る に至る、徒問ふ 是煎薬か 是丸薬か、先
生 主人に向て跨獎して曰く、令郎 美質に非れば 問ふこと能はず、学生 博學に
非れば 答ること能はず、上節に 郷人 讎す、讎するものは 是自然に 是丸
薬なり、下節は 又是煎薬なり、是 炬火を用るにあらざれば、如何ぞ 就
ち 厩 焚け起し来らん、

現代語訳

ある先生、經書を講讀し、「康子 薬を饋る」(『論語』郷党篇) という一節まで来
たとき、教え子が、

「これは煎じ薬でしようか、それとも丸薬でしようか。」

と質問した。先生は御主人に向かい、(息子を) 褒めちぎってこう言った。

「御息様が利発でいらつしやらなければ、とてもこのような質問をすることはで
きません。そしてまた、わたくしの学識がかくも豊かなものでなければ、この質問に
お答えすることはできません。さて、前の段に「郷人 讎す」とあります。『讎』[nuo]
(= 擗) [nuo] = 指を動かして練り合わせる」というからには、当然それは丸薬です。
ただし、後の文章によれば、それは煎じ薬でもあるのです。 厩炬裏の火を使つ(て薬
を煎じ) たのでなければ、「厩 焚けたり」(『論語』郷党篇) という事態が起こるは
ずはないからです。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部(六丁表)。『新鵠笑林広記』卷之二・腐流部(第
一〇〇話、九丁表)。○「嘲」呆館師欲_{シテ}長久坐_レ館趨_中奉_{セシト}主人_上也(割注) = 可能
な限り長いあいだ雇ってもらおうと考え、間拔けな家庭教師が教え子の御主人に媚び
へつらうのをバカにした話、という意味。「呆」は「默」[dai]の俗字、日本漢字音は「タ
イ」、「のろま」「間拔け」「アホ」の意。「趨奉」[tūfeng]は、「おもねる」「へつらう」

「迎合する」意。現代中国語と同じ。和刻本原本に「趨_中奉_{セント}」とあるのは、「欲シテ」
に返るものと勘違いしたことによる誤訓であろう。正しくは「趨_中奉_{スルヲ}」(嘲_ルなり)。
この割注は、遠山荷塘によるものであり、中国原本にはない。○至康子饋薬 = 『經書』
講讀の授業中、「康子 薬を饋る」(『論語』郷党篇) という一節まで来たときに。○徒
= 教え子。左訓「デシ」(弟子)。『絶纓三笑』所収の類話には「學徒」とある。○跨
獎 [kuajiang] = 『誇獎』[kuajiang] (褒める) と同意であろう。主人に気に入られよ
うという下心から、教え子の質問がすばらしいと褒めちぎったのである。『笑林広記』
原本も「跨」字(またぐ)に作る。『絶纓三笑』にこの一節はない。○令郎 = 御息息
相手の息子に対する敬称。左訓「オムスコ」(御息子)。○美質 = 素質が優れている、
ということ。左訓「ハツメイ」(発明 = 利発なこと)。○學生 = わたくし。明清時代の
読書人が用いた謙称。左訓「ソレカシ」(それがし)。○上節 = 前の段落。左訓「マヘ
ノホウニ」(前の方に)。○郷人讎 = 『郷人 讎す』(村の人が鬼やらいをする) (『論
語』郷党編)。○讎的は自然是丸薬 = 手で練り合わせたもの、それは当然丸薬である、
という意味。この「讎」[nuo]は、同音語「擗」[nuo] (動かす) の意味で解している。
これは經典の解釈としては誤読・曲解であり、私塾の家庭教師が無能であることを示
している。「讎」、左訓「マルメル」(丸める)。「絶纓三笑」所収の類話には「合郷之
人。都來替他搓讎搓讎。可不是丸薬。」(そして田舎の人は、みな孔子様のために薬を
練り合わせて差し上げる、というのじゃから、丸薬に決まるとる、というわけじゃ。)と
ある。「搓讎」[cuonuo] (= 『搓擗』) は、練り合わせて動かす(手で揉み合わせて、
団子状に丸める) 意。なお、「讎的は自然是丸薬」の一つ目の「是」は文法的には不
要である。『笑林広記』二種(『黎東輯校、濟南、齊魯書社、一九九六年) 所収テキストは、
一つ目の「是」を削除している(「前言(まえがき)」に「校点中、只改正了原書明顯
訛誤(本文を校訂し、句読を切る際に、明らかな誤字は訂正した)」と記されている)。
ただし、このような重複表現は、口頭語ではしばしば見られる。○下節又是煎薬、不
是用爐火、如何就厩焚起来、= 後ろの段落(の薬) は、煎じ薬でもある、厩炬裏の火
を使ったのでなければ、どうして「厩 焚けたり(厩が火事になる)」(『論語』郷党篇)
ことがあるのか。「康子饋薬」という一節が出てくる箇所(のすぐ後ろ)に、「厩焚。子退
朝曰。傷人乎。不問馬。」(馬屋が火事になった。孔子先生は朝廷を退出し、「怪我を
した人はなかったか。」と言ったが、馬のことは訊ねなかった。) という有名な一節が

昼間、来客があったときにも知らせてくれるのですよ(すごいニワトリでしょ)。」

親戚がまた、

「書物を読むイヌをちよつと見せてくれませんか。」

と言うと、妻はこう答えた。

「親戚の誼ですから、もう何もかも包み隠さず申し上げましょう。実はわが家は火の車、お金が足りなくて困っております。(だから少しでも小銭を稼ぐために、書物を読むわが家のイヌは)、外へ家庭教師の出稼ぎに行っているのです。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・腐流部(五丁表裏)、『新鐫笑林広記』卷之二・腐流部

(第九九話、八丁裏〜九丁表)。○狗坐箱イヌが私塾の家庭教師をする。「箱」は「館」

の異体字。左訓「カ、ヘシヤウ」(抱え師匠)。○「嘲イヌが私塾の家庭教師をする無無滴墨者」(割注)

「教養のかけらもない家庭教師をバカにした話、という意味。「滴墨」とは、「一滴の墨」

「少しの学問」の意。この割注は、遠山荷塘によるものであり、中国原本にはない。

○慣會説謊「guān huì shuō huǎng」よく嘘をつく。「慣會」は「よくくする」、「説

謊」は「嘘をつく」意。現代中国語と同じ。「説」は「説」の異体字。左訓「ヨクウ

ソラツキナレタモノ」(よく嘘をつき慣れた者)。○親家「qīngjia」婚姻による親戚

関係(第一二話「四等親家」参照)。○舍間拙宅。自分の家を謙遜して言う語。○

此異事このような変わった出来事、不思議なこと。左訓「フシギナコトタ」(不思議なことだ)。

○一時そのとき限りの、ふとした。左訓「フト」。○登堂登門。「(人

の家を)訪問する、参上する。○説了謊嘘を言った。「説shuō」は「言う」「話

す」意の動詞、「謊huǎng」は「嘘」という意味の名詞、「了le」は動詞の後に

つくアスペクト助詞、動作の完了(した)を表す。現代中国語と同じ。左訓「ウン

イフタ」(嘘言った)。

○怎生「zěnsēng」「怎麼」「zěnmē」「怎樣」「zěnyàng」「どうして、なぜ、どのようにに。左訓「ドラシテ」。

○回護嘘をつき通す、言い逃れる、強弁する。「回」は「回」の異体字。○不妨構いません、差し支えない、大丈夫。

現代中国語と同じ。左訓「カマハヌ」(構わぬ)。

○有處「有処理的辦法」、処理する方法がある、やり方がある、(私に)考えがある。左訓「シカタカアル」(仕方がある)。

○早上「zǎoshàng」朝。現代中国語と同じ。左訓「ケサガタ」(今朝方)。

去了北京に行きました。「往wǎng」は「へ」という意味の前置詞。現代中国語と同じ。○幾時「jǐshí」「甚麼時候」「shénme shíhou」の文語表現、いつ。○自家自分、自身。左訓「ジフン」(自分)。○適値中午雞啼中国原本と本文に一字異同がある。原本は「適値亭中午雞啼」に作り、和刻本にない「亭」字がある。原本のままに訓めば、「適値亭中午雞啼」。(適亭中の午雞の啼くに値ふ)「ちよつどそのとき、庭の四阿にいたニワトリが正午を告げる鳴き声を上げた。」となり、和刻本の本文に従えば、「ちよつどお昼の十二時になったとき、ニワトリが鳴いた。」となる。○寒貧しい、お金がない。左訓「コンキウ」(困窮)。○出外坐箱去了「お金を稼ぐために、アルバイトをするために」外へ家庭教師をしに行った。

補注

原本「笑府」『絶纓三笑』ともに類話はなく、和刻本「笑府」等にも本話は採録されていない。

余説

遠山荷塘の割注によれば、この話は「私塾の家庭教師(抱え師匠)がいささかの教養も持ち合わせていないことをバカにしている」という。ほら吹き男の嘘を取り繕う妻の話の最後に、「家計を助けるためにイヌが出稼ぎに行っている」とある。もはや「イヌ並の頭脳」しか持たないバカ教師を嘲うどころの騒ぎではなく、「私塾の家庭教師」などは「イヌの仕事」にすぎぬと痛烈に罵倒しているのである。表現が間接的なだけに、当事者にとっては極めて「痛い」話であろう。

⑱ 講書 (書物の講義をする)

原文

講書講書「嘲イヌが私塾の家庭教師をする長久坐館趨主人也」

一先生講書、至康子饋藥、徒問是煎藥是丸藥、先生向主人跨獎曰、

非令郎美質不能問、非學士博學不能答、上節郷人、

難的是自然是丸藥、下節又是煎藥、不三是用爐火、如何就既焚

難的是自然是丸藥、下節又是煎藥、不三是用爐火、如何就既焚

の日暮らしの生き方のほうが、まだしもマシなように思えてくる。

なお、日本では人を罵るときにの比喩として「ブタ」や「タコ」を用いるが、中国ではそのような場合、「イヌ(狗)」や「カメ(烏龜)」を使用する(第八話「楊相公」、第三二話「是我」参照)。

⑱ 狗坐館 (イヌが家庭教師をする)

原文

狗坐館ニ「嘲館師ノ無滴墨者ヲ」

一人慣會ス説謊ヲ、對ニシテ親家ニ云ク、舎間有三ツ寶、一牛毎日能行千里、一雞毎レト更止、啼一聲、又一狗善ク能讀レト書ヲ、親家駭ア云ク、有レ此異事、来日必要ニ登レテ堂ニ求看ニトコトヲ、其人歸テ與レ妻述之ヲ、一時説ニ了ス謊ヲ、怎生ニシテ固レ護セン、妻曰ク不妨、我自有處、次日親家来リ訪、内云ク、早上往北京ニ去ル了、問幾時回、答曰ク、七八日ニ就來レ、又問為何能快、曰、騎ニ了自家ノ牛ニ去、問宅上還有ニ報更雞、適、値ニ中午ニ雞啼ク、即指シテ曰ク、只此便是、不但、夜裡報更、日間生客來レ、也報シ、又問讀書狗請借一觀、答曰ク、不下瞞ニ親家ヲ説カ、只、為ニ家ノ寒ナルカ、出レテ、外ニ坐館ニ去リ了、

書き下し文

狗館に坐す「館師の滴墨無き者を嘲す」

一人説謊を慣會す、親家に対して云く、舎間に三つの宝有り、一牛毎日能く千里を行く、一鶏更毎に止だ一声啼く、又一狗善く書を読むことを能くす、親家駭て云く、此の異事有り、来日必ず堂に登て求め看んことを要す、其の人帰て妻と之を述べ、一時謊を説了す、怎生かして回護せん、妻曰く妨げず、我自ら処有り、次日親家来り訪ふ、内云く、早上北京に往き去る、問ふ幾時か回る、答て曰く、七八日、就ち来りえん、又問ふ為何能く快き、曰く、自家の牛に騎し去る、問ふ宅上、還た更を報ずる鶏有りや、適、中午に値ふ鶏啼く、即ち指して曰く、只此れ便ち是なり、但だ夜裡更を報ずるのみならず、日間も生客来れば、也た報じうるなり、又問ふ書を読む狗請ふ借して一觀せしめよ、

答て曰く、親家を瞞して説かず、只家の寒なるが為に、外に出でて館に坐し去り了る、

現代語訳

ある人、しょっちゅう嘘をついていた。(あるとき) 親類縁者(配偶者の親戚)に向かつて、こう言った。

「拙宅には、三つの宝物があるんです。一つ目は、毎日千里の道を行くことのできる牛です。二つ目は、二時間毎(一更毎に)にただ一声だけ時を告げるニワトリです(時報ドリ)。それから三つ目は、すらすらと書物を読むことのできるイヌです。」

彼の親戚はびっくりして言った。

「そんな不思議なことがあるのですか。今度ぜひ、お宅に伺ったときに見せてください。」

その嘘つきの男、家に帰って、妻にこのことを話した。

「わしゃ、ついつい嘘をついてしまった。どうやって言い逃れようか。」

妻は言う。

「構いませんわ。私に考えがあります。」

次の日、親戚が家に来てきた。奥さんは言った。

「(主人は)今朝、北京の方へ参りました。」

「いつ帰りますか。」

と訊ねたところ、

「一週間くらいしたら帰ってきます。」

と答えたので、今度は、

「どうしてそんなに早く帰れるのですか。」

と質問した。

「(一日に千里の道を行くという、例の)自分の牛に乗って行ったから(そんなに早く帰れるの)です。」

「お宅には、さらに時を告げるニワトリ(時報ドリ)もいるのでしょうか。」

と聞くと、ちょうど折よく、四阿にいたニワトリが鳴いた。妻はすかさず、ニワトリを指さして言った。

「これですよ、これ。このニワトリが、例の鳥なのです。夜中に時を告げるだけでなく、

船頭は言った。

「ほ、わたしも戌年生まれですけど、どうしてこんなに身分が違うのでしょうか。」

船頭は、さらに聞いた。

「何月生まれですか。」

「正月生まれじゃ。」

船頭は、それでハッと納得し、こう言った。

「そういうことでしたか。なるほどなるほど。わたしは十二月生まれ、つまりイヌの尻尾です。だからこうして一生涯(尻尾を)振っているのです(舟を揺らして世渡りをしているのです)。旦那さんは正月生まれ、つまりイヌの頭です。だから一生涯(人にものを)教えて生活しているのです(人に媚びてワンワン鳴いているのです)。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・腐流部(五丁表)。『新鐫笑林広記』巻之二・腐流部(第九八話、八丁表裏)。○狗頭師=イヌ並の頭脳しかない教師、バカ教師。人を罵るときに、「狗頭狗脳」(愚か者)などと「狗」の字を使う。ここでは、「戌年の初め(一月)に生まれた教師」の意味を掛けている。○「嘲(ス)館師」也 其(比)レ(ス)狗(者)ハ、以(テ)人(家)討(メ)飯(ヲ)吃(ス)ル(ヲ) (割注) = 私塾の家庭教師をバカにした話、私塾の家庭教師がイヌ扱いされているのは、家庭教師は(イヌのように)飼い主に尻尾を振って(食べ物)を恵んでもらうからである、という意味。「人家」は「その人(=家庭教師)」、「討飯」は「ごはんを恵んでもらう」「乞食をする」意。この割注は、遠山荷塘による訳注であり、原本にはない。○館師=私塾の家庭教師。「館」は「館」の異体字。○買舟=舟を雇うこと。船頭にお金を払い、舟を出してもらったこと。文字通り「舟を買う」わけではない。「買」、左訓「ヤトヒテ」(雇ひて)。○舟子=船頭のこと。左訓「センドウ」(船頭)。○貴庚=相手に年齢を尋ねるときの敬語表現。「年齢はおいくつでいらっしゃいますか。」の意。左訓「ナンノヲトシ」(何のお年)。○属狗[shǔ gǒu] = 干支で年齢を伝えるときの表現、「戌年です」という意味。現代中国語と同じ。左訓「イヌノトシ」(戌の年)。○開年=来年、翌年。中国南方の言い方。『笑林広記』の編者「遊戲主人」は江南蘇州の文人である。北方では通常「明年」という。左訓「ライネン」(来年)。○那一月生的[èr yí yuè shēng de] = 何月生まれですか。「那」は現代中国語の「哪[nā]」と同じ。近

代以前の中国では、代詞「那[è]」(それ、その、あれ、あの)と疑問詞「哪[nā]」(ど

れ、どの)に表記上の区別はなかった。「那一月」は「どの一月」という意味。左訓

「ドノツキウマレタソ」(どの月、生まれたぞ)。○大悟=はっと分かった(豁然大悟)。

左訓「ガテンシテ」(合点して)。○是了=そうだ。「了」は文末の語気助詞、断定のニュ

アンスを添える。訓読不能な口語語彙。左訓「ナルホド」。○怪不得[guài bu de] =

道理で、なるほど、そういうことだったのか、という意味。現代中国語と同じ。左訓

「フシキニモオモワレヌ」(不思議にも思われぬ)。○所以揺了這一世=戌年の十二月

生まれ、つまり「狗の尻尾」だから、(わしは)一生涯(尻尾を)振っているのだ(舟を揺らして漕いでいる)。「揺」は、「(尻尾を)振る」「(舟を)揺らす」と

いう二つの意味を掛けている。「揺」には、右傍訓「ウコカス」(動かす)、左訓「フ

ネコク」(舟漕ぐ)が附されている。なお、「所以」は「だから」という意味の接続詞。

現代中国語と同じ。「世」は「世」の異体字。○所以教了這一世=戌年の一月生まれ、

つまり「狗の頭」だから、(あなたは)一生涯(イヌのようにワンワン)啼いている

のだ(=教えているのだ)。「教」[jiào] (教える)は、ここでは「叫[jiào]」(動物

が鳴き声を上げる)という意味も掛けている。ただし、現代中国語では、この二つの

動詞は、類似音ではあるが、声調が異なる。「教」には、左訓「ヲシエル」(教える)

が附され、割注内の「叫」字には右傍訓「ナク」(鳴く)が附されている。「舌」は「世

」の異体字。○教「叫全音」(割注) = 「教」という字は「叫」という字と発音が同じ

である、という意味。「叫」は「叫」の異体字。

余説

しばらく「歳試」ネタが続いていたが、前話に引き続き、中国語の同音語によるダジャ

レを用いた笑話である。「狗頭師」とは、普通に読めば「オツムの弱い(頭脳はイヌ

並の)バカ教師」という意味にしか取れないが、ここでは「戌年の初め(正月)に生

まれた教師」という意味を効かせている。

この先生は、戌年生まれの五十歳、「イヌ並の頭脳」を持ち、戌年の頭(正月)に生まれ、

「イヌのように人に媚びを売ってワンワン鳴き(叫)」、そして「イヌのようにワン

ワンと口先だけで人にものを教えている(教)」というわけである。「イヌが尻尾を

振る」ように舟の櫂を横にゆらゆらと「揺らしながら」世を渡っている「船頭」のそ

訓読には大きな影響を及ぼす。和刻本は、「夫」を「失」と取り違え、「夫子弟子禮」を「失三子弟子、禮」と誤読している。「今日、是夫子弟子。禮トシテ應ニ坐シテ受ク。(今日、是夫子弟子、礼として応に坐して受くべし。)」と訓むべきであろう。『笑林広記』原本の句読も、ここは微修正が必要である。なお、『笑林広記』原本第九九話「狗坐館」(和刻本では第一八話)にも句読の誤りが見られる(後出)。○豈敢〓どうしてそんなことができませんか、そんなことはできません。左訓「ナニカサテ」(何がさて)。

○孔方兄〓銀貨、つまり「金」「銭」(貶語)のこと。清代の銀貨は、中央部分に「四角い穴(孔方)」が空いていたため、「孔方」または「孔方兄」と呼ばれた。ここでは、「お金」を卑しめた語「孔方兄」と、「孔方」という名前の年上の人」という意味の語「孔方兄」が掛詞になっている。なお、中国語で「兄」とは、同輩の男性を呼ぶ敬称として用いられる。必ずしも、孔子の実兄を想定する必要はない。○断不受拜〓断じて(あなたの)礼を受けることはできない。和刻本は「断」字に左訓「ケツシテ」(決して)を附す。

補注

この話は、『笑府』巻二(第四八話「謁孔廟」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』五七頁、大木康『笑林・笑賛・笑府他(歴代笑話)』(中国古典小説選12、明治書院、二〇〇八年、二四四〜二四五頁)参照。なお、和刻本『笑府』に類話はない。

『笑府』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、わずかに文字の異同がある。

『笑府』第四八話(巻二・腐流部、八丁裏)

謁孔廟

有以財入洋者。拜謁孔廟。孔子下席荅之。士曰。今日是夫子弟子。禮應坐受。孔子曰。你是我孔方兄の弟子。不敢受拜。

余説

袖の下を使って「生員」の資格を手に入れた輩を、痛烈に皮肉った話。お金の力で学校に入った者は、断じて学問の神様・孔子様の弟子ではなく、「孔方兄(卑しいお金)」の弟子にすぎない、ということである。「孔方兄」という掛詞を用いたところが、中国語としては面白い。和刻本の施訓者であり、当代一流の中国語学者でもあった遠山荷塘好みの笑話である。

⑰ 狗頭師 (戌年生まれのバカ教師)

原文

狗頭師「嘲ニ館師也。其ノ比レル。狗ニ者ハ以テ也。人ノ家討レメ飯ヲ吃スルヲ」
 館師歳暮ニ、買舟ヲ回家ニ、舟子問曰ク、相公貴庚ハ、答曰ク属狗ニ的也、開年己ニ是レ五十歳了也、舟人曰ク我レモ也属レ狗ニ、為何貴賤不レ等シカラ、又問フ那レノ一月生の答曰ク正月也、舟子大悟シテ曰ク、是レ了是レ了、怪不レ得、我レハ十二月生レ、是個ノ狗ノ尾也、所以ニ揺ニ了這ノ一世ヲ、相公正月生レ、是個狗ノ頭也、所以ニ教ニ「叫全音」了這ノ一音ヲ、

書き下し文

狗頭師「館師を嘲す也。其の狗に比する者は、人家飯を討め吃するを以てなり」
 館師 歳暮に、舟を買って家に回る、舟子問て曰く、相公 貴庚は、答て曰く、狗に属するなり、開年 己に五十歳なり、舟人曰く 我も狗に属す、為何 貴賤 等しからざる、又問ふ 那れの一月に生る、答て曰く 正月なり、舟子 大悟して曰く、是了是了、怪み得ず、我は十二月生れ、是個の狗の尾なり、所以に 這の一世を揺す、相公は正月生れ、是個の狗の頭なり、所以に 這の一世を教「叫と同音」了す、

現代語訳

私塾の先生、年の暮れに、船頭を雇って、(舟で)家に帰ることにした。船頭は訊ねた。「旦那さん、お年はいくつでいらつしゃいますか。」
 「戌年生まれじゃ。年が明けたら、五十になる。」

『訳解笑林広記』全注釈(二)

川上 陽介 (工学部教養教育)

序

本稿は、『訳解笑林広記』全注釈(一)、『富山県立大学紀要』第二六巻)の続稿であり、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』第一六話から第二六話までの日本語訳と注釈を掲載する。底本、諸本、凡例等については、前稿を参照して頂きたい。

⑩ 謁孔廟 (孔子廟にお参りする)

原文

謁孔廟ニ「嘲納_下レテ錢ヲ及第_{スル}者_上ヲ」
有_下リテ銀錢_ヲ糞_{シテ}縁_{シテ}入_レ津_ニ者_上、拜_ニ謁_ス孔廟_ニ、孔子下_レ席_ヲ荅_レ之_ニ、士曰_ク、今日は_レ失_ニ子_弟子_弟子_禮ヲ、應_ニ坐_{シテ}受_ク、孔子曰_ク、豈_ニ敢_セヤ、你_ハ是_レ我_カ孔_方兄_ノ弟_子也、断_{シテ}不_レ受_レ拜_ヲ、

書き下し文

孔廟_ニ謁_ス「錢_ヲ納_レテ及_ビ第_{スル}者_ヲを嘲_ス」
銀錢_ヲを以_テ糞_{シテ}縁_{シテ}入_リ津_ニ入_ル者_有リ、孔廟_ニに拜_シ謁_ス、孔子_席に下_リ之_ニに答_フ、士曰_ク、今日は_レ是_レ夫子_弟子_弟子_禮として_レ應_ジに坐_シて受_クべし、孔子曰_ク、豈_ニ敢_ヘてせんや、你_ハ、是_レ我_ガ孔_方兄_ノ弟_子なり、断_ジて拜_ヲを受_ケず、

現代語訳

お金で権力者に取り入って「生員」の地位を手に入れた書生が、孔子廟を参詣した。(孔子廟に鎮座します)孔子は祠より降りて返礼した。書生が言う。

「今日は孔子先生と師弟の礼を尽くすために参詣したのでから、ぜひとも祠に着座なさったまま(私の礼を)受けていただかなくてはなりません。」

孔子は言った。

「そんなことできるわけがなからう。そなたは孔方さん(「孔方兄」|| 銀貨)の教え子じゃ(お前は金で「生員(学生)」の地位を買っただけの書生の分際、真剣に学問に打ち込んでいる私の弟子ではない)。だから、断じて(お前如きの)礼を受けるわけにはいかんのじゃ。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・腐流部(四丁裏〜五丁表)。『新鐫笑林広記』巻之二・腐流部(第九七話、八丁表)。○「嘲_下納_レテ錢_ヲ及第_{スル}者_上ヲ」(割注)|| お金を支払って科挙試験に及第した者をバカにした話。これは遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。○糞縁|| 賄賂やコネで権力者に取り入ること(第一四話、第一五話に前出)。左訓「テヨリシテ」。何らかの「手づる(ツテ)」によって、という意味であろうが、未詳。○入津|| 学校に入る。「津[Dan]」とは、もともと孔子廟の前にある池のこと。転じて学校のことを「津宮」と言い、科挙の第一試験に合格し、「生員」の資格を獲得することを「入津」「進学」などと言った。○今日は失_ニ子_弟子_弟子_禮ヲ、應_ニ坐_{シテ}受_ク、|| 「失」は「夫」の誤り。中国原本の本文は以下の通り。「今日は夫子弟子禮。應坐受。今日は、孔子先生と教え子が礼儀を尽くす日である。(だから、孔子様は)祠に座ったまま、教え子の礼を受けなければならない。」ただし、『笑府』所収の本文は中国原本『笑林広記』とは句読が異なり、文意も微妙に異なる。『笑府』の句読は以下の通り。「今日は夫子弟子。禮應坐受。(今日は、孔子先生と教え子が、礼儀作法から言つて、座ったまま礼を受けなければならない。)」読点の位置が一文字ずれているのだが、